
現代召喚者のススメ ~あのー、アクマ出てきたんですけど~

通神?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代召喚者のススメ ～あのー、アクマ出てきたんですけど～

【Zコード】

Z6837L

【作者名】

通神？

【あらすじ】

八月五日午前一時十三分十二秒。

一般人にとつては何の変哲のないこの時間は、僕たち・・鯨井芹、鈴川萌、狂火菰の三人にとつて人生を変える一瞬になつた。

”思い出作り”の為に作ったずさんな魔法陣から現れた五人の少女。突然の事態に驚きを隠せない僕ら（一人を除く）は、何とか元の世界に帰つてもらおうと……え？ 帰れない？ ……は？ しかもそれは僕らのせい？

そしてしまいには、自分たちと”契約”して世界中に散らばつた7

2人の悪魔を封印しろだって！？

キャラ紹介（ネタバレ注意）（前書き）

初めての投稿です。

パソコンに不慣れなのでとんでもないミスをするかもしれませんが、温かく見守ってくれると幸いです。

キャラクター紹介（ネタバレ注意）

キャラクター紹介（ネタバレ注意）

鯨井芹 黒茶髪、丸っこい瞳、童顔。両親が世界を渡り歩く有名な考古学者で、歴史と家事が得意なこと以外は普通だと言い張る。高校一年。一人称は「僕」

鈴川萌 黒髪黒瞳、知的メガネ、長身（180センチ強）。文武両道という高性能の持ち主だが、夢である”非現実を自分の手で引き起こす”ことに一心不乱なせいでいつも突拍子もないことをする。

高校一年。一人称は「俺」

狂火菰 濃紺髪、切れ長な瞳、小柄な体型。三年前に起こった事件により自分の意志とは正反対の嘘しかつけなくなってしまい、二人と芹の幼馴染の齊以外とは「ミミユニケーション」が取れない為、いつも傍観者の立ち位置にいる。高校一年。一人称は「俺」

徳之沢齊 栗髪茶瞳、健康的な体躯。芹の幼馴染で世話役。見た目とは裏腹（？）な家事スキルを持つており、彼の両親から世話を頼まれている（しかし、今現在芹の方が実力は上）。高校一年。一人称は「私」

アンドロマリウス 紅髪、勝気な瞳、ボニー・テイル。召喚された悪魔の一人（？）で委員長みたいな性格。自分を呼ぶ時には相手に『マリー』と呼ぶことを強要する。

ダンタリオン 黒紫髪、妖艶な顔つき、お姉さま体型。召喚された悪魔の一人（？）で見た目と違わぬ性格。最初に『あらあら』と言うのが口癖。

セエレ 白銀髪碧眼、華奢な体躯。召喚された悪魔の一人（？）で大人しい性格。が、自分が地味だと言わるとキレる。

ヴァサゴ 黄髪黄瞳、おこちやま体型。召喚された悪魔の一人（？）で天真爛漫な性格。それ故人に『マカセを言つともしばしば。

ブルフ拉斯 銀髪銀瞳、人形のような表情。召喚された悪魔の一人（？）で無口無表情。しかし、精神年齢は少々幼い。

キャラ紹介（ネタバレ注意）（後書き）

補足ですが、菰くんのセリフはルビが「本当に言いたいこと」で、セリフが「言っていること」になりますので、注意ください。

プロローグ - - 七月一十九日（前書き）

前回の投稿から随分と経つてしまつて、大変ご迷惑をおかけしました。

しかし、何とかこれで本編に入れそうです。

最初は芹くん編から。

プロローグ・七月二十九日

八月五日午前一時十三分十一秒。

人類にとつては何の変哲のなく過ぎていくハズだったこの時間は、僕ら 鯨井芹、鈴川萌、狂火薙の三人にとつて、全てを変える一瞬へと変貌を遂げた。

纏わりつくような風、光る魔法陣、そして、悪魔と呼ばれる者との邂逅。全て嘘だと信じたかった。

「さて、貴方達ね。私達を呼んだのは」

ふいに声をかけられ、弾かれるように振り向くと、そこには紅髪の少女がこっちを見ていた。多分、僕らに向かって言ったのだろう。けど、何故だかそれがどこか遠い世界のように思えてならない。

いや、そう思いたいだけなんだ。

しかし、こっちが黙っている間にも彼女はゆっくりと近付いてくる。その先は 僕？

「……そう、黙っているならそれでもいいわ。でも、ここにいる以上、貴方達に訊くしかないの」

数十秒という時間を労し、僕の目の前にやつて来た少女は、その白魚のような指をゆっくりと僕の頸へ這わせながら、真紅の瞳に妖艶さを孕ませてこう言つた。

「だから訊くわ。貴方達の望みは何かしら」

そんな現実から逃げるよう、僕は全ての始まりであつたあの日

七月二十九日のことを思い出していた。

「サークルを作る？」

七月二十九日 数少ない夏休みの登校日に、このクラス……いや、この学校で一番の変人であろう悪友 鈴川萌の一言を僕は一

文字違わず復唱した。

「 つて一体どういふことなんだ？」

ワックスでツンツンに固めた黒髪が目立つ一ハ〇センチ強の長身男性は、黒縁の知的メガネをくいつ、と中指で押し上げ、顎を支えて『考えてます』のポーズを取りながら応えた。

「ん？ それは言葉の意味が分からぬ、と解釈してもいいかね？」「妙に偉そだな……、それ以外にどう解釈できるんだよ？」

「スペルは c i r c l e。意味は円、仲間、活動としての範囲」

「……この屁理屈つ！」

僕の嫌味を、不敵な笑みとともに切り返す崩。いつものやり取りだけど、やっぱり腹が立つ。

この男、見た目もいいし運動も勉強もできる、いわゆる、文武両道の高性能な人間なのだが、繰り出す行動や言動が全て突拍子のないことが災いしてその才能を全く生かせてない。要するに、何をやらしてもとんでもない方向へと飛んで行ってしまうのだ。それで被害を受けるのはいつも僕達なので勘弁してほしい限りだ。

本当にこいつは僕の悪友なのか不安に、
まあ、そんな事はどうでも良くなつて

「そんな事つて……」

「そんなモンだろ、お前なんて」

「……とりあえず、出口はあつちだよ」

「はつはつは、そつちは憲だぞバカ野郎」

「あつはつは、早く飛べつてんだよこの野郎」

今日も僕らは仲良しだ。

「全然、良くないぞ（ちょっとといいか？）」

朗らかな笑顔で互いに友情を確認しあつていたら、ふいに背後から声をかけられた。振り返ると、そこには短く切り揃えられた濃紺の髪に切れ長な瞳が特徴的な、小柄な少年の姿が。

「おう菰、いつからいたんだ？」

「……つこさつき。気付いてたぞ（ずっと前から。気付かなかつた

のか？」

「はは、わりわり」

萌の台詞に、やや細めの双眸をやがて眇める少年。

彼 狂火菰はちょっと影が薄い。とある事件であまり話さないのと、自ら進んで目立たない所にしようとすることも重なつてか、少し目を離すと見失つてしまつほど地味なのだ。

「全然、つまらなそだな（ちょっと、面白がりだな）」

「お、お前もそう思うか？」

「いや（ああ）」

噂をすれば、僕に代わつて菰が萌と会話をしているのが見えた。この会話、傍から見れば全く会話が成り立つてないよう見えるが、実は一人の間ではきちんと成立している。

なぜなら菰は 嘘つきだからだ。

それも生半可な嘘つきじゃない。言つたこと全て（・・・・・・）が、無意識に意志とは反対の言葉となつて出でてくるのだ。そのせいで、僕達としか『』二ケーションが取れないのが。

けど、それはものすじに正直者だと僕は思つ。例えるなら、千回のうち三回だけ（・・）本当のことを言つ『せんみつ』よりも、百分の二十九点九九（・・）言わない『天邪鬼』の方が信用できるようなものだから。

なので、一見否定しているように見える菰の台詞は、このイベントに賛成の意思をしめしているらしい。何のことか良く分からぬけど、一度否定しておかなくては。

「それでお前、自分の宿題やるか？ 芹

「やらないよ」

「そりか……、じゃ、俺の分よろしく（ほん）」

「分かったよ。それならやつてお くかい！」

僕は、萌の宿題のテキストを思いつきり地面に叩きつけた。教室

が少し静かになつた。

「おおノリツシ「ミミ。 お前に教える」とはもうないな」

「免許皆伝しても嬉しくないわい」

「まあ、それはいいとして」

「拾えよ」

「お前の方が拾えよ。 お前が叩きつけたんだろうが」

「貴様が渡したのが元凶だらうがつ！」

全く……、と言ひながら渋々といった感じでテキストを拾う崩。何が全くだ何が。

「……で、どうすんだ？ 本当に」

「……へ？」

「『へ?』つて、何も聞いてなかつたら、お前」

「う……」

図星を突かれて言葉に詰まる。すると崩は嘆息しながら、腰に両手をあてて、

「よし、そんな鯨井君の為に、この鈴川さんが分かりやすく教えてしんせよう」

「なんで上から田線なんだよ」

「ぶつちやけて簡単に言つと、お前はサークル作りの雑用係決定、きやは という事だ」

「恐ろしいまでに傍若無人だなお前は！？ そもそも何をするのかも

「あ、先生来ねえじやん。何にもないなら帰ろあつと」

「人の話を聞けよつ！？」

「やばい。こいつの変人ぶりにエンジンがかかり始めやがつた。早く話に決着をつけないと、あの口癖が出てきてしまう。」

「……で？」

「『で?』とはどういう意味かね」

「その『サークルを作る』つてどういふことだよ」

「言葉のまんまだが？」

「具体的に！」

とりあえず、じこが分からなきや文字通り話にならない。すると突然、萌は人差し指をピンと立てた。

「さて、ここでクエスチョンです鯨井君」

「…………は？」

「一般的にサークルとは、何を目的に作られるでしょう？」

「…………意味不明…………はつ！」

しまつた！？ あまりにも話の流れが理解不能だったから、もうこの口癖が口から零れてしまつた。うう、あまり言いたくなかったのに……。

「出たな、意味不明。今日は早かつたなー」

「うう、貴様のせいだ……」

「いやー、それほどでも」

「褒めてないわ！」

こつやつて遊ばれるから。今度こそ絶対に治そ、

「ほり、早く答え給え」

「…………何かを呼び寄せるため、だろ？」

「正解。緑のパネルが飛び込んで、赤のパネルがはい消えた！」

「意味不明、…………つ！ はあ…………」

うと決心した途端に口を突いて出でてしまつ。何このイメージ？

「…………にしてもよく一発で分かつたな」

「…………知らない（分かる）」

「お前とどれだけつるんでたと思つてんだよ」

「…………まあ、それにお前ら俺の夢知つてるもんな」

「世の中の“非現実”に遭遇すること、だつけ？」

「おかしくない。初めて聞いた（変だな。何度聞いても）」

そう、こいつがこんなにも変わつてるのは、一概にこの夢の影響が大きい。つてかそれが原因だ。小学校の低学年の頃から“非現実”となるものを追い求めていたらしい。幽霊に始まり、白魔術、黒魔術、U.M.Aまで色々な物を試してきたという。一体この男のど

「からそんな情熱が湧いてくるのか不思議でしょうがない。

「……で、今度は何を呼び出すんだ？」シテ〇か？」

「そんなありきたりなモノ、当の世間にやつたわ」

やつたんかい。

「じゃあ一体何を」

「これだよ」

そう言つて悪友が出してきたのは、一枚の「ペーー用紙。どうやらインターネットのサイトを「ペーーしたらしく、不可思議な模様の円陣に、説明文らしきものが田がチカチカしそうなほどビツチリ書かれている。

「…………何、！」

「何よこれ？」

あ……、という僕の声とともに、横から何者かが紙と台詞を掠め盗つていった。

「今度は何をやらかすつもり？ あんたたち」
紙が持つてかれた方向を見ると、そこには栗色の髪で細身だけど健康的な体躯をした少女が、つまらなそうにそれを眺めながら、そう呟いていた。

「なんだ、誰かと思えばただの齋か」

「『ただの』つて何よ。一応あなたの幼馴染よ、芹」

少女 德之沢齋は、紙から視線を外すと僕に標準を定めてそう言い返してきた。確かに小さい頃からの仲だけじ。小・中・高と同じ学校だけじ。

「おやおや、お決まり（トングプレート）な台詞とともに登場とは、よつ、お熱いねつ」

「はいはい、あんたも毎回毎回同じ台詞をありがとね、崩
そんな事を考えていると、崩と齋の軽口の叩き合いが始まつてい
た。参つたな、これが始まると話が進まなくなるんだよなあ……。
長いし。

「…………で、これで一体何を呼び出すのさ？」

僕はこの騒音未満喧騒以上の静いを止めるべく、一人の間に割り込む。すると、萌は再び某クイズ番組のような口調で語り始めた。

「では、再びクエスチョンです」

「何で世界ふ ぎ発見風！？」

齋、言いたいのは分かるが、こいつにツツコんだらキリがないぞ。奴はスリも驚愕の手癖の悪さで僕からあの紙をひつたくると、近くの机に力強く叩きつけた。妙に長つたらしに説明文と幾何学的なグラフィックを一瞥した後、視線を戻す。

「鯨井君、『ソロモン七十一柱』というものを『存じかね？』

おい、クイズ調じゃないんかい。

「これぐらいなら分かるだろ。何だって有名な考古学者の息子だからな」

「……その言い方止める、って言つてるだろ」

はは、わりわり、と苦笑いしながらも目で答えを促す悪友。

「……確か昔、ソロモンっていう王様が従えた七十一人の従者、だつけ？」

「イスラエルよ、イスラエル」

「正解。スーパーひ し君げーっと」

「あつてる（ちがうだろ）」

僕に質問していたハズなのに、気付けば齋と菰も話に参加していた。

「確かにそれって、従者じゃなくって、悪魔じやなかつた？」

「え？ そうなの？」

「そうだが？」

「結構有名よ。知らなかつたの？」

「へえ……。物知りだね、齋は」

やっぱりそういうオカルト的なものって、女の子の方が詳しいのかな？

「な、なな何言つてるの！？ これくらい常識よ！ そんな当たり前の事褒められたって嬉しいわよつ！」

14

……何て思つてたら、速攻で否定された。何もそんな顔を真つ赤にするほど怒らなくとも……。そして、隣にいる崩が『このナチュラルテンプレートが……』って呪詛のよつこ咤いてるのが異様に怖い。

「そ、そんなのが一体この紙と何の関係……が

その頃は、思つもよりなかつたんだ。

「呪ふんだよ。…………ここつりをなーーー。」

それが、全てを変える言葉になるなんて。

プロローグ・・七月十九日（後書き）

……異様に長くなってしまった。プロローグのくせに。このよきな感じのものがもうじきはじめて続くので、『』で承ください。（何の注意報？）

全ての始まり - - 七月一十五日（前書き）

今度は萌くん視点から書いた物語です。
また、過去モノローグですが。彼がこんな変人になった経緯（？）
を懸命に書いてみました。

全ての始まり - - 七月一十五日

八月五日午前一時十三分十一秒。

七十一を適当に入れて導き出したこの瞬間が過ぎ、今日の前に起きている光景に俺 鈴川萌は大いに歓喜していた。

夢にまで見た“非現実”との遭遇。すぐにでも諸手を挙げて喜びたい所だが、今はそうも言つてられない。

いや、心境はもう『きやつほう』という感じなのだが、本当は 心の奥底では、こんな事しなければ良かつたとも感じている。

別に後悔をしているワケじゃない。

ただ

「こんな所で何やつてんのよ？」萌

七月一十五日。

外の暑さが嘘みたいに感じられるほど肌寒い、スーパーの野菜売り場。

右手に真っ赤なトマト、左手に濃い紫色のナスを持ったまま頭を捻つてている俺の耳に、遠くから一人の女性の声が響き渡つた。

振り返つてみると、そこにはふんわりとした栗髪を揺らす一人の少女の姿。

「……誰かと思って振り向いてみれば、ただの齊クンじゃないか」

「『ただの』って何よ、『ただの』って『

声の主 徳之沢齊は、俺の軽口に応えながらこちらに近付いて

きた。

「『ただの』じゃないとすると、もしや君はスーパー齊クンなのかね！」

「誰がどんちのきいた事を言つたのよー？」

俺の台詞にいちいち突つかかってくる齊。彼女の反応を見ている

と、段々面白くなつてきて軽口が止まらなくなるから不思議だ。

「はつはつは、冗談だよ、冗談。英語で言うとマイケルジョーダン」

「…………」

むう、どうやら俺の渾身のギャグはウケなかつたようだ。まあ、

常人には理解できないものがあるからしようがないが。

「あなたのセンスには、どんな変人でもついてこれないと思うわ……」

この俺の思考を若干でも読んだ彼女は、読心術の才能があるのかもしれない。

「で、本当に何しに来たのよ。こんな所に」

齊はそう言つと、俺が両手に持つてゐる野菜をしげしげと眺め。

「…………これ、毒とか入つてないわよねえ？」

「失礼な。れつきとした無農薬だ」

そう言つてしまつそれを、ホントかしら、と訝しみの視線を送り続けていた。彼女は本当に俺を何だと思っているのだろうか。

まあ、どうでもいいが。

「そういう君はどうしたのかね？」

「見れば分かるでしょう？」

「見て分からんから訊いてるのではないか。全く、これだからゆとりは……」

「あんたもでしちうが！」

「まあ、俺も芹に振る舞う料理の買い出し、としか分からんな」「わ、分かつてんならさつ わと言ひなさいよつー」

ぜえぜえと息を切らしながらも、ボケをツツ「コミ倒す彼女。やはり楽しい。流石はあいつ直伝のツツ コミだ。

言い忘れていたが、彼女は俺の悪友 芹の幼少期からの幼馴染だ。彼曰く、幼稚園の頃からの腐れ縁らしく、小・中と同じ学校で、高校も同じになつたのが災いして、入学と同時に長期出張が決まつた彼の両親が息子の世話役として頼んだせいで、ちょっとばかし煩わしくらいに家にやつて来るという。確かに少しばかり性格に難

がないワケではないが、彼女の家事スキルは称賛に値する。それを『鬱陶しい』というあいつの気持ちが、俺には理解できん。つくづく羨ましい男だ。

ちなみに、今日俺がここにいるのは、何を隠そう俺自身の夢の為である。

“非現実”との遭遇。

もつと言えど、それらを皿らの手で引き起こす事。

それが誇りであり、プライドのような俺の夢だ。

きつかけは、何の変哲のないものからだつた。ほんの些細な好奇心と、小さな体験から俺の夢は始まつた。最初の頃は実家の近くの墓地で一晩中座つて、幽靈を待つてたり、中学のころには白黒両方の魔術を試したり、誰もいない学校に忍び込んで奇怪な円陣をライ

ン引きで作つてみたりした。

けれど現実は そんなに上手くいかなかつた。

一晩中待つても幽靈は来なかつたし、魔術なんてただの嘘八百。サークルなんて作つても何も来ないどころか、見回りに見つかって大目玉を食らうだけだつた。

……あまりの現実の柔軟性のなさを恨んだりもした。『現代は小説よりも奇なり』と言つた奴の顔をぶん殴りたくなつた。周りにバカにされ、時には蔑まれる度に荒れた。

そんなある時、一度だけ本気で夢を諦めそうになつたことがある。

理由は何て事はない。ただガラの悪い連中に、暇つぶしにボロボロにされただけだ。けど、当時の俺は心身ともにボロボロで、色々なものが折れかかっていた。

そんな時、公園のベンチに座つてた一人の老人にこう言われた。

「自分が見つけた道なら、何があつてもその道をバカみたいに突き進んでみろ。さすればいづれ、その道を理解してくれる者がきっと現れる」

何でそんな事が分かるんだよ、と訊き返すと、その老人は自信満々に答えた。

世の中はそういうものだ、と。

なので俺は、今は一人じゃない。俺には芹と菰がいる。夢を理解し、共に分かち合つてくれる友がいる。

「……………萌？　おーい、聞いてるの？」

「……………」

「もう、しつかりしなさい！」

「おぶていんっ！」

一体何を手に入れたのよー、という声と頭に迸る激痛に我に返ると、右手を手刀にした齋が田に入ってきた。どうやら俺はトロツプ에서도していたらしい。

「痛いな、全く。俺は壊れたテレビじゃないんだぞ」

「もともと頭が壊れてるようなもんだから、丁度いいんじやない？」「ひどい言われようだ。

「で、本当の本当に何しに来たの？　まさか“非現実”とか言つやつじゃないわよね？」

「良く分かつたな。えらいえらい」

「そんな事で褒められても嬉しかないわよ」

見事に俺の目的を見抜いた齋に、満面の笑みで応える。

そう、今日ここに来たのは他でもない。今回挑戦する“非現実”に必要なものを調達する為だ。

ソロモン七十一柱。

古代イスラエルの王 ソロモンが従えていた、特殊な能力を持つ七十二人の悪魔。現代に伝わっている有名な悪魔達だ。世の中には『おとぎ話の産物だ』というリアルストもいるが、具体的な能力に加えて七十二という中途半端な数が、俺の中の好奇心をくすぐつて仕方がない。

因みに食材は、召喚の儀式に必要なので買い出しに来たのだ。そんな事言つても彼女には分からないだろうが。

「まあいいわ。それより芹の家でご飯食べてく？」

「おつ、いいのか？」

一瞬、ウチのニコアンスが違つたような気がするが、気にしない。

「どうせ、誘わなくとも行くつもりだったんでしょ芹の家に？」

かも長く

「バレたか」

「それなら一人前多く作つても、大して変わらないから食べてけばいいわ」

「そうか、……羨ましいぞ芹い。こんな気の利く彼女がいるなんてよお」

「な……つ！ なな、何ふざけた事言つてんのよバカつ！」

「ぎがていんつ！」

顔を真っ赤にしながらお決まり（テンプレート）な台詞と攻撃をモロに喰らわせてくる齋をからかいながら、こんな時間が永遠に続ければと祈つていた。

そんな一人を巻き込んでしまつた罪悪感が、頭にこびりついて離れない。

全ての始まり - - 七月一十五日（後書き）

やつぱり彼は変人ですね（笑）

次回は菰くんが体験した、とある出来事をお送りします。
お楽しみに

兆し - - 八月一日（前書き）

投稿が遅かつたり早かつたり、不安定な作者ですいません。
今回は菰くんが主役の話です。ちょびっとホラーじみたところがありますが、楽しみながら読んで頂ければ幸いです。

兆し - - 八月一日

全てが思い出の彼方に消えていけばいいのに……。

八月五日午前一時十三分十一秒。

その一瞬は、俺 狂火菰の淡い願望をあつさりと打ち砕いていった。

続いて、心の奥底から後悔の念が湧きあがつてくる。

それは、この現象の全ての原因であるつ日 八月一日に遡る。

「今まで待つたんだ。返事を聞かせて貰おつか、芹

「…………はあ」

学校から一駅離れた、小都会のファミレスの一角。

俺と萌は、先日話していた例の件の返答を芹から聞くためにここまでやつて来た。本来ならこういう話は、海外に出張していて現在一人暮らしの芹の家で行つ方が都合がいいのだが、今回は少し勝手が違うらしい。萌曰く『芹の考えは当に読めているからな。物事とは常に先に先に行動するものだよ、菰つち』だそうだ。典型的な日本人体質の芹がどういう返事を出すなんて、俺でも容易に予想できるのだが。

「…………、分かった。僕もやるよ。菰はともかく、お前は目を離すと何するか分からぬからな。萌」

案の定、予想通りの返事を確認した俺は、窓からぼんやりと外の景観を眺め始めた。俺の役割は、あくまでも芹の同意を証明するための参考人。それ以上の事は聞いてない。何の気兼ねもなくのんびり出来そうだ。

俺は、人間が大嫌いだ。

人は、何かと言つて『数字』というものにこだわる。

そう思つてしまつたのは、三年前のとある事件が原因だつたりする所もあるのだが、それを差し引いても、人間といつ存在にあまり好意といつものが持てないのでい。

数字しか追い求めない人。アスファルトの道で懸命にティッシュを配る女性、汗を拭きながらその横を通り過ぎる小太りなサラリーマン。みんな利益といつ名の『数字』しか見ていない。数字、数字、数字。それがいくら世の中の真理だとしても、気に食わない。口クに“人間”を見ている者なんてほとんど存在しない。

だから俺は“嘘つき”になつた。この狭い世界で、“人間”を見てくれる人に出会つために……。

「おお～い、菰。聞いてるか？」

窓の外を見ながら物思いにふけつていると、ふいにそんな台詞が俺の鼓膜を大いに揺らした。弾かれるよつにその方向に視線を向けると、そこにはさつきまで話していた菰。そして、その相手をしていた芹の丸つこい瞳まで、こちらを捉えているのが見えた。

「……あ、ああ（い、いや）」

咄嗟に口を突いて出てきた言葉は、俺の意志とは正反対の言葉を紡ぐ。

「やつぱりな、そだと思つたぜ」

「仕方ないよ。菰は傍観者なんだろ？ お前が言つには

案の定と言わんばかりの態度の崩を芹がなだめ、さつきまで話していた事を復唱し始めた。

今日ここに来た目的は

場所を探す事だという。

崩曰く、今度行つ召喚の儀式には大きく開けた場所が必要らしく、そういう場所を見つけるにこの辺り好都合なのだといつ。確かに駅の周辺は建設中のビルも多く、少し都市部から離れた住宅街の近くには自然も多い。ほとんど最適に近い。

なのでこの辺りを散策することにした（独断で）らしいのだが、『以前、肝試しに行つた廃ビルはどうだらうか』といつ芹の意見に崩が『あそこは建設予定地になつてゐるからもう使えないし、あそ

「こじや雰囲気出ないだろ？がボケH」と反論したところから、諍いが始まってしまったという。…………何か、話が段々とズレてきているのは気のせいか？

「思い出したらまた腹が立つてきた」

「俺もだ」

「そもそもお前のカンはアテにならないんだよ！この間だつて『近所の前田さん家にUFOが出る』って大嘘こいて、大目玉喰らつたのもう忘れたのかよ！？」

「うるせえ！あの時は黒魔術の順序を間違えただけだ」

「間違えたも何も、それらしいものは出なかつたじゃないか！」

「つてかそれ以前に、あそこでお前がこけたからいけないんだろうが」

「お前が足を引っ掛けで『団大 作 戦』とかほざくからだり…」「だからつて俺達まで巻き込むか普通！？」

「つるさいこのツンツン頭！ どつかの幻想でもブチ殺してやる」

「黙れこの童顔！ お子様ランチでも頼んで食つてろ」

「なにおう、お前なんか」

「決まらないなら、のらくら帰るか？（決まつたなら、さっさと行くぞ）」

二人の口論が白熱しそうになりそうな所で、割り込むよつこパンヤリと言い放つ。

萌は物事の発案者なのはいいが、物事を独断で決めつけすぎだ。今回は俺もその案に賛成だったから何も言わなかつたけど、もう少し周りの意見を参考するべきだと思う。そして芹、お前は決まつたことをとやかく口を挟まない方がいい。諍いの元になるだけだ。

そんなような内容を一人に伝え、席を立ち上がると、さつきまで言い争つてた二人も後に続いて店舗を出た。いつもの事だ。萌が発案し、芹がそれを改善して、最後に俺が客観的にまとめる。それが俺

達のスタイルなのだ。

今回は範囲が広いといつ事で、各自別行動といつ形で周辺の探索活動を始める事にした。

萌が駅周辺の都市部、芹が少し離れた住宅部、そして俺は町外れの自然区域の探索担当に割り振られた。基本的に芹達以外の人間とはあまり会話が成り立たない俺は、他人と会話する機会のある所には出来るだけ行きたくなかったし、俺自身、一人になる時間が欲しかったので御厚意に甘えて、町外れの探索に向かった。

見慣れた景色を眺めながら、再び思考に戻る。

今まで当たり前のように話していたが、俺が“嘘つき”である事に気付いたのは、あの一人が初めてだつた（齊は芹に教えられて知つたらしいが）。とある事件でこうする事に決めてから三年間、蔑まれ、馬鹿にされてきた俺にとって、初めてできた理解者だ。唯一無二と言つてもいい。彼らがいるから俺はこの世の中に『存在』を見出せる。誰に何と言われようと、俺は彼らがいるだけで十分なのだ。

芹と萌がいるから、俺は俺としていられるのだから……。

「……」

不意に我に返り、足を止めると、俺の目の前には見覚えのない光景が映つていた。

森。

そうとしか形容のしようがない。右を左を上を下を前を後ろを見ても深緑に彩られた木々や青々とした雑草が鬱蒼と生い茂つている。

いや、下以外は、だ。

俺の真下。そう、今現在自分が立つているこの場所だけが一本の草が生えていないのだ。

あまりにも出来過ぎた偶然。全身に寒気が進る。

何だ、この異常なまでの寒気は？

沈黙。

「…………何だよ（おこ）」

重すがる寒気に耐えきれなくなつて、つい口から言葉が漏れて静寂を打ち破るが、数秒もしない内に再び重たい空気が静寂と共に沈んでゆく。

次の瞬間。

突風。

それも、囮つたかのようなタイミングで。

「 つー 」

ヤバい。

何故だか知らないが、俺の中の本能が頭の警鐘を鳴らす。このから早く立ち去れと、体を急かす。

しかし、体が全く動かない。脳の命令を受け付けてくれない。

永遠にも等しい数秒が、静寂に流れゆく……。

その硬直から俺を解放してくれたのは、意外にも近くから響く音だった。

電子音。

持つている携帯電話の音声が静寂をかき消し、俺はよつやく縛られた体の自由を取り戻す。この音は着信音なので液晶画面を覗くと、そこには鈴川萌の文字が。

応答ボタンを押す。

『 もしもし～』

「…………誰だ？（きだすか）」

随分と軽い声音で応答する悪友。何かあったのだろうか？

『どうだ？ いい場所見つけたか？』

「…………俺は（そつちは？）」

『ダメだ、俺も芹の方も全くアテのないまま帰つてきた』

「…………納得できない（そうか）」

これは珍しい。これまでアイツらひとつんだけで、一度だつて全
身“非現実”レーダーを張つているあの崩が、何も見つけられなか
つたなんて事はなかつたのに。

『ところどそつちはどうだ、菰？』

「い、いや（あ、ああ）俺は…………」

『…………話をしたらどうだらうか？』

一瞬だけ、そんな考えが脳裏を横切る。

いや、何を考えているんだ俺は？ 何かが変だ。全てが都合よく
進んでる気がする。トントン拍子に話が進み過ぎていてる気がする。
…………このまま言つちゃダメだ。

『…………俺は…………』

何とかして正直に言わ（嘘をつか）なくては。
なんて考えていると。

『5…………4…………3…………』

「？」

不意に、俺の鼓膜に向かつて謎のカウントダウンが展開されてい
た。一体何なのだろう？ なんて思つても、謎のカウントダウンは
一向に止まらず。

『3…………2…………1…………0…………さあ、その場所を吐け…………』

『…………は？』

いつもの茶れ目つけな声が、その真意を教えてくれた。

『今お前は何かを見つけている。しかし、とある事情で話せない。
そうちどう？』

どこからそんな根拠が出てくるんだ、と訊くと。

『ん？ 何だ？ 何か違つてているのか？』

すると、崩は不思議そうに訊ね返してきた。『…………』で正直に答えれ

（嘘をつけ）ばいいのだが。

「あ、ああ（い、いや）」

嘘しかつけない（正直者な）自分が、少しだけ恨めしい。

『じゃあ、後で場所をメールしておいてくれ。それと、もう遅いから（・・・・・）俺達は先に帰るわ』

「…………え？」

じゃ、と着信が切れるのを合図に周りを見渡すと、もつさまで青かつた空は、うつすらと茜色に染まり始めていた。

慌てて携帯の液晶画面を見ると、五時三四分というリアルな時間が示されていた。確か俺が芹達と別れたのが一時頃だったハズだから、実質四時間ここにいた事になる。

…………まるで狐につままれた気分に、俺は最早呆然とするしかなかつた。

*

夕闇に染まり始める閑静な住宅街。

俺は一人、メールを打ちながら帰路についていた。

俺は嘘つきだ。

しかし、それは“話すこと”だけに限定されており、メールや手紙など“文章”を媒体にすると、俺は自分の意志をそのまま反映することができる。なので、俺が情報を伝えなきやいけない事があると、いつもやってメールで伝える事が多くなる。

「…………さて、これじゃダメだな（よし、これでいいかな？）」

長い時間をかけてようやく打ち終わった文章を見て、思わず一人呟く。あとは、これを芹と崩に送れば。

…………ちよつと待て？

何故、俺はこんなにもあつさり物事を理解しているんだ？

何故、俺はこんなメールを作つたんだ？

何故、俺はあの場所を教えようとしているんだ？

「ツ！」

マズ、と本能が感じた時には

新編 中国の歴史

「送信しました」

アレハンドロ、即ちアレハンドルが死んだんだ。

何かおなし ど

兆し - - 八月一日（後書き）

個人的に、菰くんが一番のお気に入りだつたりします。

でも一番書くのが大変なのも彼（笑）。

まあ、手間のかかる子ほど可愛いつていいますし。

……え？ それよりも早く悪魔出せつて？ 女性キャラ増やせつて？
- - すいません。しばらくは齋さんで我慢してくださいっ！

召喚 - - 八月五日深夜（前書き）

投稿日を見てみたら、規則正しく毎日出しているのに気が付き、キャラの名前に大きな間違いをしていることに気がきました。ルビもきちんと打てないし……。
死んでしまえばいいのに……。自分。

召喚 - - 八月五日深夜

八月五日午前零時三十三分。

暗闇という物質で形成された空間を懐中電灯で切り裂きながら、三人の少年 鯨井芹、鈴川萌、狂火菰はとある森の中を突き進んでいた。肩には重量感のあるリュックサック、両手にはレジ袋を抱え、閉ざされた道なき道行く三人。

「おー、見つけたぞ」

先陣を切っていた萌は長い茂みのゲートを抜けると、真っ先にそんな声を洩らした。続いて芹、菰が荒地を知覚。ぞんざいにリュックを降ろし母なる大地に鎮座する。

「はあ、やつと着いたよ」

「…………^{おも}軽かつた」

全く情けないぞ、という萌の台詞を一人は無視。バリバリ運動系の部活の連中並みの体力の持ち主と、放課後を帰宅に捧げてきた自分達を比較するのが根本的に間違っているんだと言わんばかりに。

「…………まあ、お疲れさん」

すると、彼らの心の声が届いたのか、一人元気な萌が労いの言葉をかける。

芹の肩を叩きながら。

「一番重い 火鉢を運んでくれてよ

「騙したなあつ！」

潮風が似合いそうな爽やかな笑顔を、止めの台詞と共に。

八月五日午前零時四十六分。

萌を中心に、奇々怪々な模様が描かれた円陣を作り始めて数分後に、その張本人 萌は芹を呼びつけた。

「一体どうしたのさ？」

一人黙々と作業を続ける菰を視界の隅に置きながら、彼の許に寄

る芹。こんな時に呼び出されるのは口クでもないモノであることはすでに身に染みるほど思い知らされている彼にとって、この呼び出しあまりいい気分ではない。

「君に重大任務を授けようと思つ

それでもこの予感が杞憂であつてくれと願つたが、やはり彼にとつては頭痛のタネにしかならないような台詞に、図らずとも眉間に青筋が立つてしまつ。この男に常識を理解させることは出来ないと思うと、悲しみが込み上げてくる芹今日この頃。

「…………何？」

しかし、ここで黄昏でいても仕方ないので答えを促すと、案の定、奇怪な返事が返ってきた。

「呪文」

「は？」

「呪文だよ。じゅ・も・ん」

「…………意味不明なんだけど」

いくらスタッフカードで強調しようと、理解できなければ意味はない。あまり使いたくない口癖を言いながら先を促すと、萌は続けた。彼が言つには、儀式の最後の総仕上げとして、現世との扉を開く為の“鍵”として、呪文は重要な価値を持つのだといつ。

「だったら菰にやらせればいいじゃないか。どうして僕が……」

それでも尚闇わりたくない芹は、何とか責任転嫁を図る。しかし、そんな彼に萌はこう返す。

「あのなあお前、俺が菰に内緒でお前に相談した意味分かつてんのか？ 菰はあまり他人とコミュニケーションが取れないからこういうのには関わらせたくないし、それで失敗して責任を押し付けるのも心が痛むだろ？」

「まあ……」

こいつも一応人の事考えてんだなあ、と感慨深いものを感じた芹は。

「だからお前に頼んでるんだよ、芹。な？」

「…………そういう事ならしょうがないね
じゃあ萌^{おまえ}がやればいいんじゃないか、という当たり前の事に
気付かなかつた。

八月五日午前零時五十二分。

地面上にあの幾何学的な円陣が出来上がると、計画発案者の萌は自分達が持つてきたりユックやビニール袋の中をまさぐり出した。

「な、何をやつてるのさ？」

火鉢を持つてきた芹は、自分以外の持つてきた荷物が気になつて思わず訊ねた。彼らが軽い物を持ってきたなら迷わず、グーで殴るつもりで。

しかし、彼が取り出したのは、果物や魚介類など、冷凍生物関係なく揃えられた食材だった。乱雑に入れられた所に家事が趣味の芹は一瞬憤慨しそうになつたが、保存方法が良かつた事が幸いし、少し溜飲が下がる。

「召喚儀式というのは、召喚する側がわざわざ異界の住人を呼び出すんだ」

「要するに、“貢物”つてこと？」

まあ、そういう事になるな、と萌は一息つけ、続ける。

「悪魔^{マーティー}の中にも属性つてものがあるらしくてな。水星^{マーキュリー}、火星^{マーズ}、木星^{ジュピター}、土星^{サターン}と言う風にな

「にして今回は？」

「全部だ」

「うん、そんな事を訊いた僕がバカだつた」

予想通りの反応に思わず溜息を洩らす芹を、萌は無視。火鉢を菰と協力して円陣の中心に運び、火をおこし、食材をくべる。

淡い白色の煙がゆらゆらとライトの届かない漆黒の夜空に漂い、火鉢の周辺は、白いヴェールに覆われたような神秘的な空間へと変わつていた。

そこで、異変は起きた。

一瞬。

ほんの一瞬だけ、彼らの作り上げた魔法陣が仄かに光を放つた。

「「あれ……？」」

そう思つた芹と菰は、ほぼ同時に声をあげ、互いを見る。

「……今の、見た？」

「いや（ああ）」

「何だろうね……？」

「……分かる（わからない）」

二人が困惑してゐる間にも、時は流れしていく。

八月五日午前一時三分。

「いよいよ十分切つたぞ」

と無駄に張りきる長身の少年 萌を尻目に、小柄の少年 菰

は、一人である事を考えていた。

三日前に起こつたあの出来事。あんな事があつたからなのか、十分前に起こつた現象に一抹の不安を拭えないでいる。メールを送つた後、嫌だと言い切れないまま今日この時まで来てしまつた。

出来る事なら、ここで起きてる事全てを思い出の彼方に消えてほしい。それが彼が持つてゐる数少ない願望の一つだ。

しかし、この儂い思いさえ自分のせいに消えてしまうかもしれない。

出来る事なら、何も起こらないでくれ……っ！

彼が祈つてゐる間にも、時は流れ。

そして、あの瞬間が訪れる。

*

八月五日午前一時十分。

眠気眼をこすりながら僕 鯨井芹は、答えのない難題に頭を捻つていた。

悩みの種は勿論あの男が出した“呪文”を唱えると、う単純明快複雑怪奇なシロモノ。何にも考えず、脊髄の赴くままに作った言葉の羅列をテキトーに話せばそれで済む話なのだが、相手は変人の権化と噂されるほど変人。生半可なことを言えばコンマ数秒でツツ「ミ」が返ってくることは必至。何とも扱い辛い男だと今になつて思う。

「本当、どうし」

「おおーい、そろそろ決まったかあ？」

噂をすれば何とやら（確かに影にさす……だったような気がする）、僕の気など全く感じない鈍感変人が無駄にやなタイミングで話しかけてきた。

「……はあ」

「何だよ、その俺が来ちゃいけない、みたいな空氣は。昼寝はちゃんとしてきたんだろうな？」

そんな話、初めて聞いたが。

「何で昼寝の話になるんだよ……」

こんな変人じやなければ、顔もそこそこなのに……、とちょっと現実逃避。

「…………で、決めたか？ 呪文」

「……はあ」

「おいおい、頼むよ。ここにきて考えてないとか言うなよ」

案の定、この男には現実逃避を許してはくれず、僕の返事を求める視線を送つてくる。

再び嘆息が漏れる。

「いや、あることはある」
知らないといいんだけど。

「おう何だ、言ってみろ」

当然のようにそれを促され、僕は人差し指をピンと立て、右手を天に、左を地面に向け。

「エイムエツ イム。我は求め訴えたり」

「悪くんかつ！ 悪魔んなのかつ！？」

「もう、良く分かつたな。お前の親の世代のアーメだぞ？」

「そんな所で褒められても嬉しくないわボケエ」

的中したくなかった予想が的中し、ダメ出しられて、逃げ場がなくなってきた。

「芹、崩」

すると、蚊帳の外の菰に背後から話しかけられ、助かつたと思いながら魔法陣の前に立つ。

時刻は八月五日午前一時十二分四十秒を回った。

「いよいよだな」

「いや（ああ）」

「本番あんなの止めてくれよ。お前のジジくさいネタには付き合つてられねえからな」

「それつて言つちゃいけないんじや……？」

ほら、やつぱり菰がワケ分かんない、といつ顔してるし。そして十三分になつたその瞬間。

再び仄かに光り始める魔法陣。

「え……つ、また」

「五……四……三」

突然起こつた現象を訝しむ時間も無く、カウントダウンが始まつた。これやっぱり絶対におか。

「一……一」

つてそうじやないつ！ 何か言わないと……つ！

「……」

「げ、元氣ですかあああああああああああつつ……！」

「……」

11

.....」

「おい、あれほどジジ

ט' עיון עיר

ロノマ放送前の講演会

とした瞬間

『正統編』

「？」

不意に、そんな声が聞えてきた。

具体的には、年頃の女性がA B 48の1・5倍の声量と種類の
さりに、水面に重たいものが入る音。

卷之三

見ると、魔法陣の中が揺れている。本当に水面が出来てる……？
まるで夢でも見ているみたい。

『JRの言語は日本語でしょうか?』

『あらあら、今日は日本人のようみたいね』

『でもでもー、この国つて無宗教じゃなかつたつけ?』

· · · 惡魔崇拜者

『悪ひ悪ひ、そんな事言つてないでわざわざお詫びねよ』

『 『 『 『 せえー、つのー!』

ポンっ、と。まるでアニメのびっくり箱を開けたような音が聞えると同時に、一陣の風とまばゆい光が駆け抜け、視界が真っ白に塗りつぶされていく……。

やがて世界が色を取り戻すとそこには、いるハズのないヒトが、
いた。

それが、午前一時十三分十一秒の事だった。

召喚 - - 八月五日深夜（後書き）

やつとりせ召喚までいざわつけました。
次回もなるべく早く出せよつて頑張りますのでよろしくお願いします。

鍵 - - 五日深夜（前書き）

随分と時間が空いてしまったよつた気気がします（今回はわりと本気で）。

自分でもびっくりするほど駄文ですが、生温かい田で見守ってくれれば幸いです。

今回でやっと時間が前に進みました。さあこれから三人はどうなるのでしょうか？

是非ご覧ください

鍵 - - 五日深夜

それは、一人の少女だった。

燃えるようなワインレッドのポニー・テイルに、勝気な瞳。見た目は僕達と同じ十六・七あたりで、若干齢と同じ雰囲気を漂わせる。

彼女の名前はアンドロマリウス。そう名乗っていた。

それは、一人の女性だった。

どこかの結晶のような黒紫の髪に、妖艶さを孕ませた容姿。見た目は二十くらいで、カジュアルな服装がより一層妖艶の色を濃くしている。

彼女の名前はダンタリオン。そう名乗つて微笑んだ。

それは一人の幼女だった。

向日葵のようなライトイエローの短髪に、あどけなさを残す顔立ち。見た目は十いくかいかないくらいで、ポケットが多い機能的なジャケットがどこか新聞記者ジャーナリストを彷彿とさせてくれる。彼女の名前はヴァサゴ。そう元気に名乗つていた。

それは一人の少女だった。

雪のような純白の髪のボブカットに華奢な体躯。見た目は十四五と僕達より少し下で、セーラー服の白さが逆に彼女の色白さを引き出している。

彼女の名前はセエレ。伏目がちにそう名乗つてくれた。

それは一人の幼女だった。

刃物のような白銀の髪に、機械のような無表情。見た目は十二・三あたりで、全身黒色の「スロリ」を着ているので、一瞬人形なのか

と錯覚させる。

彼女の名前はプルフ拉斯。たったそれだけ名乗った。

「さて、貴方達ね。私達を呼んだのは「吹きすさぶ」一陣の風に紅髪を揺らしながら、アンドロマコウスと名乗る少女はこちらを見た。その双眸は、髪と同じくワインレッドをしている。

そんな光景を田の前にして僕 芹は、思考が停止しかけていた。

「……そう、黙つていたいならそれでもいいわ」

違います。あまりの光景に言葉が出ないだけです。

「でも、ここにいる以上、貴方達に訊くしかないの」
僕が心中でそんな事を考へる間にも、彼女はこっちに近づいてくる。その先は 僕？

「だから訊くわ」

そして、その彼女が数秒後に僕の顎に指を這わせている事を知覚。す「ぐくすぐつ」たいし、何かいけない事をしてるような錯覚がする。

「貴方達の望みは何かしら？」

僕はそんな現実から逃避する為に、過去の出来事を思い出していく。えーっと……。

サークルを作ろうと言いだした 場所を探索してここを見つけた
そしてここに良く分からぬ円陣を作つて声をかけた 召喚成功。

つまり、諸悪の根源は 。

「いいなー芹、一人だけアバンちえるのぶつー」

「萌、だあああああつー！」

そう思つてからの僕の行動は早く、隣で羨ましそうな声を出して
いた悪友を上段回し蹴りで吹き飛ばした。

萌は全く防御行動を取れなかつたらしく空中で見事に一回転した
あと、地面に熱烈キッス。ふん、人をバカにするからこうなるんだ。

あいつが起き上がる前に、罵倒の言葉をかけようとした瞬間。

「だ つ！ 人の話を聞きなさ いつ…！」

「「へ？」

背後から、何か吹っ切れた声が轟いた。

振り返るとそこには、さつきとはうつて変わつて顔を真つ赤にした少女の姿が。てか至近距離で騒がれたから耳痛い。

「あらあら、やつぱり切れてしましましたか」

「確かに私が悪かつたわよ……。柄に合わない」とだと自分でも分かってたわよ」

彼女の隣にいたダンタリオンと名乗る女性が案の定と言わんばかりに苦笑し、同じく隣にいたセエレと名乗っていた少女が怯えている間にも、アンドロマリウスの言葉は止まらない。

「あつはつは、マリーちゃんがおかんむりだー」

「ええつ！ そんなのんびりと構えてていいの！？」

「おーすごいな芹、悪魔とのファーストコンタクトに成功だ」「嬉しくないわつ！」

気が付けば遠くから朗らかに笑つているヴァサゴと名乗った幼女と、変人地球代表の板挟み。怯えているセエレと無表情のブルフ拉斯、固まっている芹だけが心の支えだ。

「あんた達、覚悟出来てるんでしちゃうね？」

「あ、あのう、謝った方が……」

「…………怒ると怖い」

どうしようか困ついたら、その二人からアドバイスを頂いた。それもそうだ、とりあえずこの場を治めていただかないと。

他の一人とアイコンタクト、心を一つにしたところで。

「「はい、自分達が悪かつたです」「いいえ、自分達は悪くないです」

「どうなのよ……」

あ、嘘つき（まじめ）のことられてた。

閑話休題。

「 要するにあんた達は“思に出作り”の為に、ソロモン七十一柱たちを呼んだと、そう言いたいのね？」

「 「はい、そうです（こいえ、そ�ではあります）」「

「ふやけんじやないわよ」

今にも切れそうだった彼女を何とかして落ち着け、今置かれている状況を懸命に説明したといふ、返ってきた言葉がこれだった。結構傷つく。

「まあ、俺は呼び出す氣マジンマジンだつたけどな

「お前は黙つてお話をややこしくなるから。折角穩便に帰つてもちらおつと思つて」

「おこお前今何て言つた？『帰す』って言つやがふうつ！？」
僕の拳が崩の顔にクリティカルヒットした。

「帰る」

「そうしていただけると、「『ありがた（くな）いんですが』」
つて菰も喋らないで！ 混乱するから！」

「……悪くない（わるい）」

結局、何の意味も無く呼び出された事が分かった彼女達は、くるりと踵を返して魔法陣の中に帰ろうとした。

が。

「…………帰れない」

耳に響いてきた言葉に、僕は耳を疑つた。

「あらあら、扉に魔力の反応が全くみられないわね」

「それじゃあ、魔力を込めたら戻れるんじゃない?」

「そうね、ちょっとやってみますわ」

しかし、呆然とする僕らに対し、突然の事態に冷静な悪魔たち。光を失った魔法陣に向かって両手をかざし、そこから溢れる光を魔法陣に送る。どうやら原因が分かつたようだ。良かったよか。

「…………え?」

つたと思った瞬間、魔法陣に送った光がバチイツと音をたてて、空氣中に霧散した。

静まり返る荒地。

尋常じゃなく重たい空氣。

「…………えーっと、一体何が

「魔力が弾かれたってことは……」

「…………もう一つの可能性を考慮する必要がある」

話しかけようとした僕を無視しながらも、話し合いは続く。

「…………もう一つの可能性』って……?」

「でもそんな事が有利得るの? 高位の魔術師じやない上に、『召喚の書』^{グリモア}や『鎖骨の書』^{レメゲトン}もない。こんなただのガキが起^こしたっていつの?」

「あらあら、それを見る(・・)のが貴女の能力じやないのかしら?

「…………仕方ないわね」

しばらくして会合が終わったのか、アンドロマリウスがこっちを見ると、何かを紡ぎ始めた。

「…………正邪の瞳は世界を見抜く』」

刹那、変化が起きた。

彼女のワインレッドの瞳が、文字通り混じりけのない真紅に染まり始めた。

思わず吸い寄せられそうな双眸に半ば呆然とする僕ら。

しばらくすると、その瞳は元のワインレッドに戻り、口元に元の全員に聞えるような声で。

「やっぱり、ここからが原因よ」

衝撃の台詞を言い放った。

「小さな方が三つ、大きな方が一つ。これだけあれば十分よ」

「あら、それで誰が持つてるの?」

「全員よ。大きな方は 分からない。一つあるのは確かなん

だけど、どいつも持つてるまでは把握できないわ」

「…………あのー、何のことかさっぱり分からんんですけど」

話が一段落ついた所で、割り込むように会話に介入すると、彼女はこちらを向いて僕を指差してこう言った。

「簡潔に言わせてもらひわ。元の世界に帰れなくなつたの。他でもない、あんた達のせい（・・・・・）でね」

頭の中が真っ白になつた。

*

「悪魔の偽王国?」

しばしのショックから立ち直り、彼女達が仰つた現象名を、僕はそつくりそのまま復唱した。

「わ。それがあんた達が引き起こし、私達を囚禁することに成功した原因よ」

ふと顔を上げると、そこには王立ちでこちらを見下ろす紅髪の少女。

悪魔の偽王国。

何ともファンタスティックな現象名だ。

まあ、それはそれとして。

「あのー、どうして僕らは正座させられてるんでしょう?」

とりあえず今、僕達は下が荒地にも関わらず強制的に正座をせら
れている。砂利が膝に当たつて地味に痛いんですけど……。

「それはあんた達が他人の話を聞かないからじゃない！」

「…………注意力散漫」

「蹴。しかも酷い言われようだ。注意力散漫つて小学生じやある
ま。

「おい早く続きを説明しろよ。あとで小説のネタにするがふうつー。
僕は、瞳をまるでダイヤのように輝かせる崩を殴り倒した。

「すいませんでした」

「分かればよろしい」

閑話休題。

「で、その現象は一体どういうことですか？」

本当ならそんな厨一設定聞きたくもないのだが、今回はもうそん
な目に遭つてるのでツツ『まない。むしろツツ『んでられない。

「随分と素直ね？」

「本当は信じたくないんですけど……」

「でなきゃこんな所から逃げてます。」

僕そう言つと、彼女は紅髪を揺らしながら語り始めた。

悪魔の偽王国というのは、詰まる所『悪魔と人間の勝負』なのだ
そうだ。

とある“鍵”が中心となり召喚を行う事によつて呼びされたソロ
モン七十一柱は、元の世界から半ば強制的に弾き出され、この現象
が終わるまで戻ることができないらしい。

勝負の決着条件は二つ。

一つは、“鍵”を持つ人間が全ての悪魔を『封印』すること。
もう一つは。

彼女達が、世界を無に帰すこと。

「 「 「…………」「 「」」

とりあえず、頭が痛くなつてきた。

「来・た・よ・超展開 つ！」

隣で物凄くはしゃいでる崩の脳ミソが少しだけ羨ましい。

「え、えーっと、もし……、もしその話が本当だとしたら、その原因って誰の責任に？」

「あんた達全員よ。当たり前じゃない」

「冗談だ、と言われるのを期待していたがあつさりと裏切られた挙句、現実を見せつけられる。

「な、何を根拠に」

「そりやあ、あんた達の中に“鍵”があつたからよ。悪魔の偽王国は“鍵”がなければ基本的に起きないんだから」「うわー、あ、あのう、その“鍵”って一体何ですか？」

僕はさつきから気になつてた単語について訊ねる。もう色んな事を諦めかけてきた。

「……あんた、『ソロモンの大きな鍵、小さな鍵』って知ってるかしら？」

聞いたことがある、確かにソロモン王が従えていた七十一人の従者について書かれていた本だつたような気がする。

「こっちの世界ではあれは魔導書つて呼ばれる代物なんだけど、私は達の世界では違つていて、それらは五十もの“能力”を持つ唯一悪魔と“契約”して、その力を引き出すことができる人間の事よ。小さな方が四十七本、大きな方が三本。

つまりあんた達は、これが始まつた時から悪魔の偽王国から逃れられない特別な人間つてわけ」

意識を放棄したくなつた。

「ちょっと待てよ」

すると、さつきまではしゃいでいたハズの崩が話に割り込んできた。

「思つたんだがよお、それつて 奴はそこで一息つけ。

「 それって、 “ 鍵 ” である俺達は、ソロモン七十ー柱であるあ
んたらと “ 契約 ” しなくちゃいけないんじゃないか？」

僕は全力で意識を放棄したくなつた。

鍵 - - 五日深夜（後書き）

突然ですが、
悪魔の偽王国のルビの案を募集します。
それまではノールビでいくのでよろしくお願いします。

契約 - - 五日深夜（前書き）

シンテリって何ですか？ ヤンテリって何ですか？

どうしてそんな自分がラブコメなんか始めてしまったのだろうか？
もづ、何にもわかりません。

気が付いたらこんな文を書いていたなんです。
温かく見守ってくれると幸いです。

つまるところ、僕達は彼女達と“契約”するところになつた。

何でこいつ言う事になつたのか。そんなの決まつてる。

「いやあ、満天の星空。絶好の“非現実”日和だぜ」

「何でそんなに晴れやかなんだよ、お前は

この馬鹿な悪友の一言のせいだ。

『それって、“鍵”である俺達は、ソロモン七十二柱のあんたらと“契約”しなきやいけないんじやないか?』

確かに、僕らがもし(・・)“鍵”とかいう存在だつたとしたら、そうするのが一番なのかもしれない。けど、僕達は『普通の』高校生。そんな特別な存在なんかじやない。

第一、彼女の言つてることが全て本当とは限らないんじやないか。この男は人を疑つてことを知らないんじやなかろうか?

「それぐらい分かつてるつて」

「今僕の気持ち読んだ!?」

「そういえは今更だが」

「無視!?」

「その契約方法つて何なんだ?」

瞬間、世界が止まつたような気がした。

ただ一人、紅髪の少女だけが。

「…………」

「なあ、教えてくれよ。そうしなきや俺達だつて協力できないぞ

「…………そ、それは」

「目を逸らすな、目を」

「あらあら、私達が代わりに説明しましょうか?」

「さへはひざでシヤニシて」。

「ひやう！」

意外と可愛い声を出す紅髪少女。
それでも崩の攻撃は終わらない。

「くっくっく……。わあねじりやんじゅうじー。」

「止める変質者がお前は！？」

どうあえず危なそうなので頭にチミツフ 本当に何をしてかすか
分からぬいなコイツは。

すると、相手がいなくなつた紅髪少女と黒髪の女性が会話してい
るのが目に入つ。

「…………、
マリー？ 言いたくないなら私が言いましょうか？
自分で書い。あんな 建ガキなんかこなめられて

「そんなの簡単じゃーん」

た瞬間に、黄髪の子が、小首を傾げながら。

「鍵」と私達が『キス』して終わりじゃん

とんでもない爆弾を投下していった。

1000

どうしよう、脳の許容範囲が追いつかない。えーっと、どういう

事だ？

「文字通り、キスすりやいいんだろ？」
「やつぱりかああああああつ！」

僕は頭を抱えて絶叫した。ここが森じゃなかつたら、近所迷惑も

「まあ、天命だと思つて諦めろ」

「爽やかな笑顔止める」

悪友の台詞に脊髄反射でツツ「ミながら地面に突つ伏す僕。

「ま、すでに一人、逃れられなくなってる奴がいるしな」

「え？」

「…………た、頼まない（たのむ）……、助けないで（たすけて）くれ」

突つ伏したまんま萌が向いた方向を見ると、ちょっと離れた所で菰が困惑した表情でこっちに助けを求めていた。

その腕には、白髪の少女 セエレがしがみついていた。

それは、ほんの少し前に遡る。

「なあ、芹、萌」

「「うん？」」

彼女ら 悪魔達の登場のショックをどうにかこうにか峠を越えた頃、僕達は突然菰に声をかけられた。その視線はすごく真面目だ。

「どうしたのさ、菰？」

それが少しばかり気になつた僕が菰に訊ねてみると、彼は唐突に指を立て、ある少女を指した。白髪の少女 セエレ……だつたつけな？

「彼女がどうかしたの？」

「気に入つたんじゃねえの」

呑気な口調で口を挟む萌。お前は黙つてろ。

「…………この子」

すると、菰が何かを呴き。

「…………天使？」

そして、小首を傾げていた。

うん、確かに疑わしい。突然街中で『この子何に見えます？』とか訊かれたら何の躊躇いも無く『普通の人間』と答えてしまうだろ

う。特にこの子は、例え悪魔だと言われても……何と言つか……。

「…………派手、だな」

「「ああ、そんなハツキリと」」

「本当にですか！？」

「「「え？」」」

突然耳に響いた声に弾かれるように向くと、ウワサの張本人が瞳を輝かせてこっちを見ていた。一体何が嬉しいのだろう、あんな事言われ。

「「「あ」」」

分かった。

理解できた。

「」の子は、菰の言つていることを真に受けてるんだ。

「…………あー、ドンマイ 菰」

「…………嬉しい（うれしくない）」

そう言つて心の底から溜息をつく友人に、僕は同情の念を隠せなかつた。

「そういえばそうだつたね」

現実に戻ってきた僕は、呑気な口調でその光景を見守る。でも、良かつたじゃないか菰。そんな可愛い子に好かれちゃつてさ。う、羨ましくなんかないんだからねつ！（シンデレ

「…………良かつた（よくない）。しかし、似合つなか（し、にあわない）」

「ちょっと待つて菰、君も僕の心が読めるのかい？」

僕に集まる奴つて、みんな読心術師なんだろうか。

でも、菰がそう言いたくなるのも分からなくもない。突然、可愛い女の子に好かれるとちょっと狼狽するし。

「あのー、セヒレさん？ 薙は『地味』って言いた

「殺しますよ？」

彼女、性格に難があるらしい。

あの子はひづも、『地味』と言われるのが物凄く嫌らしく、一度その言葉を言つたが最後、（彼女の特殊能力なのか）ビーナの核兵器を平氣で持つてくる（必死で止めたけど）。ホント同情するよ、薙。

「あれ、皆さん“契約”しないんですか？ だつたら私が最初に」「あ……」

僕らが呆然としていると、当の張本人が薙と唇を重ねた。
すると、一人の足元に奇妙な模様の円陣が浮かび上がり、徐々に光が彼らを包む。やがてゆっくりとその光がおさまると、薙の中指に筒状の指輪が赤銅色に鈍く輝いていた。

「な、何あれ？」

「まあ、今までの経緯から言つて、ソロモンの指輪とか言つんじやねえか？ 確かあれ、付けてると悪魔を使役できるらしいから」

「そうなの？」

「そうね、そういう呼び名もあるわ。でも私達の間では、ただの“契約”の証にすぎないわ」

僕達の会話に割つて入ってきた紅髪の少女はそこで言葉を切ると、「私達と“鍵”をつけただけ（・・）の」

そう言つた。

妙に重たい言葉で。

「……」

僕は何故かその言葉を聞いた途端に、とんでもないことをしてしまつた、という気持ちが今更になつて感じられてきた。

「あらあら、そんなに悲觀にならなくつてもいいのよ？ いつまでもあそこに引きこもつてゐのにつきぱりしてた所でしたから」

「そーそー、私達は私達で自由にやらせてもらつよ。何てつたって悪魔だもーん。なーんて」

対するこの一人は、こつちに強制的に来させられた事を樂観的に捉えているようだ。貴女達はもう少し危機感を持ちましょよ。
「それよりも、大事なことは私達と君達の誰と誰が“契約”するか、じゃないかなあ？」

待つて下さい。僕の周りには何人の読心術師が存在するんですか？

毎日思うがどうして僕の周りには口クな奴がいない。

「決まつているだろう。俺が四人だ」

「あ、どうぞどうぞ」

「ダ ヨウ俱 部か！？」

そんな僕も口クな奴じゃないのかもしれない。

「却下よ却下。それだとあまりにも不公平じゃない」

「あらあら、流石は正義の悪魔ね。そうね、確かに不公平ですわね」

「と、当然よ」

ダンタリオンの台詞に、ない胸をちょっとばかり張るアンドロマリウス。おそらく崩にいじめられたから、あいつの従者になりたくないんだろう。

「じゃあ、公平に一人ずつ“契約”する。それでいいわね？」

「おつけーい」

いや、お前には訊いとらんだろ、とツツ「ミミ」になるのを何とかこらえている間に、紅髪少女が頷いていた。

「じゃあ、まずは私からでいいかしら？ うふふ、先に茶髪の坊やと“契約”して、貴女の困る表情を見てみたいけど」

ダンタリオンは艶めかしい笑みを浮かべながら、崩の方に近付く。
「 こっちの方が、面白そうだわ」

そのまま、まるで怪盗のように華麗に崩の唇を奪つていった。あいつの右手の中指に赤銅色の指輪が嵌る。

「あー、私も私もー」

続けてざまに、黄髪の子も記者の突撃取材ばかりの勢いであつといつ間に契約完了。

残される僕ら三人。そして、嫌な沈黙。

「ガンバ 芹」

「はあ、やつぱりそうなるのか……」

目の前にある現実を受け入れなきやいけないのか、と嘆息するその瞬間。

「……頭下げて」

ぐいっ、という音が出そうながらいの力でシャツの襟首を引っ張られるまま頭を下げる、そこにはプルフ拉斯の人形のような顔が。展開される魔法陣。

一瞬の接触の過ぎると、僕の右手にあの指輪が嵌められていた。契約完了ってことか？ でも僕のファーストキスがこんな簡単に取られると、何か悲しくなつてくる。最初は『普通の』人間がよかつたなあ……。はあ……、こんな事するんじゃなかつたなあ。

「……安心して。私も初めて？ だから」

なぜ疑問形になるのか、僕は知りたいよ。

でも何だかんだで、残るはただ一人。

「あらあら、これで最後の一人になつてしまひましたね、マリー」黒髪を揺らしながら、腹黒そうな笑顔を見せるダンタリオン。多分あの人は純粋なうんじやなかろうか？

「わ、分かつてるわよ。“契約”すればいいんでしょ！」

だ、大丈夫最初のあれを思い出せばいいのよ、……多分。と徐々に尻すぼみになつていく紅髪少女の声。だ、大丈夫かなあ……。そう思いながら正面を向く。

「「うつー」

そして、思わず呻き声をあげる僕ら。

そりやこうなるよ。さつきは認識する暇もなく契約が終わつたけど、今は互いに意識した上での行為。緊張するに決まつているじゃないか！

それに、彼女メッチャ綺麗じやん！ 白磁のような肌、伏せがちな瞳、整つた顔。僕にはちょっと高値の花すぎるので。

「か、勘違いしないでよね。別にあんたの為にするわけじゃない」
やがて、僕の目の前に辿り着いた紅髪少女は両手で僕の頬を固定。
眼前で瞳を潤され、僕の思考は完全停止。そして。
「この戦いを本当の意味で（・・・・・）終わらせる為にするん
だからね」

気が付いた頃には、もう契約は終わっていた。

契約 - - 五日深夜（後書き）

次回からは、芹くんと一口を中心に戯いていこうと思っています。
……戦闘パート、いつ書けるかなあ（遠い目）。

……おかしい、こんなハズじゃなかつたのに。約一週間ぶりの投稿です。遅れています。ネタが出ませんでした。反省はしていませんが、頭の中で自分を絶賛説教中ですので厳しいことを言われると凹みます。温かい目で見守ってくださいと幸いです。

八月五日午前六時三十六分。

「……ふあ」

突き刺さる口差しに田蓋を強制的に開けさせられた僕 鯨井芹
は、平穏な静寂の中で欠伸を噛み殺していた。

「あれ、もうこんな時間だ」

ベッドの横に置いてある田覚まし時計で時間を確認し、ボソリと
呟きながらベッドを降りる。

あの一夜が過ぎた。

僕は“鍵”とやらとして彼女達 ソロモン七十一柱と“契約”
した。

そして、自分が契約した悪魔を自分の家に連れて帰る事での夜
は幕を引いた。

「……はあ」

思わず溜息が漏れる。

そりゃあ、今は父さんも母さんもいないからいいけど、もし帰つ
てきたらボツコボツにされると思うと嘆息ぐらいしたくなる。何で
こんなに晴れやかな朝なのに、こんなに憂鬱な気分にならなくちゃ
いけないんだろう……？

「……起きるか」

ずっとこのまま現実逃避したかったけど、現実はそう簡単に覆る
ことがないのを昨夜思い知つたので、立ち上がって部屋をあとにし
て彼女達が寝ているハズの部屋に向かった。

この家は一階建てで広さも普通の家と比較しても大差はないが、
ある一点だけ他の家とは大きく違つていることがある。

それは一階が 地下にある事だ。

職業が考古学者だからなのか、どうもウチの両親は地面より下の
部屋じゃないと作業が集中できないという変わった性癖の持ち主だ。

なのでこの家では、普通の家の一階は二階となつてゐる。

まあ、今はそんな事どうでもいいんのだけど。

「……確か、彼女達は一階と二階に分かれてたつけな？」

正直、面倒くさい。

どうも、悪魔と言つても朝に弱いワケではなく、普通の人間と同じサイクルで生活しているのだそうだ。けど、二人の意見は真っ向から食い違ひ、普通の生活をしていたアンドロマリウスは一階、ちよつとインドア派だったフルフラスは地下に寝ることになった。

「全く、起こす僕の身にもなつて欲しいよ」

一人ぐちる。

厄介事を抱え手間が増えただけ、対してこいつの見返りはゼロ。まさに百害あって一利なし。

嘆息。

しばらぐしてアンドロマリウスが寝ている部屋の前に立ち、ドアをノックする。

「おーい、朝だぞ。起きろ」

「…………」

静寂。

「…………開けるぞー」

沈黙。

寝かせておいてそのまま存在をなかつた事にしたいのだが、生憎彼女達は消えてはくれないので仕方なく直接起こすこととした。

「おー、起き

魔窟だった。

そして、その扉を開けるとそこは

目の前に足の踏み場のないほど散乱する衣類、日常品。さすが悪魔としか言いよのないぐらいいの散らかりよつが相当頭にくる。……いや、まだその段階なら許そう。その類ならまだ片づければいいだけだ。けど

けど、それらと一緒に転がつてゐる厳つい白銀の拘束具たちが、

どうしても理解できない。

「何でこんなものがあるのさ つー！」

とりあえず、僕はシャウトせずにほいられなかつた。

前の二つはまだ分かるよ。けど、拷問器具が一般家庭の床に転がつておかしくない！？ ディのイギリス正教！？

「…………ううん、つるつるいわねえ…………」

日常に襲いかかつた“非現実”に目を疑つていると、その先のベッドから紅髪少女のうるさうに声をあげた。

「う、うるさいって何だつ！ ちよつとそこにながあつ カチヤンッ。

ちよつと頭にきたので説教しようと部屋に一步足を踏み入れた途端、何かに足を滑らせて転んでしまつた。顔、痛つ。

……かちやん？

ふと、その音のした方向に視線を向けてみる。

両手に、手錠。

「な、なんじや じつや あふう

某優作な台詞を言あうとした瞬間、僕の体がフローリングを滑走。見ると天井に滑車。

あーなるほどー、僕はあれに引きずられて。

「何でそんなものが天井にあるんだよおおつー

絶叫のまま滑車はロープを巻き上げる。

その数秒後。

ガツシャーンッ！

僕は、何故か檻の中にいた。

どうしよう、あまりに意味不明な流れなんだけど。ええっと、簡単にまとめると。

「この紅髪少女を起こしに来た。

部屋の惨状を看過できずに起こそうとした。

様々な経緯を経て飼育人間の完成。

「う、嘘だろおおおおつー！」

「つたく、本つ当にうるさいわねえ……」

すると、この光景を作り上げた張本人が、一度目のうるさそうな声を発しながら上体を起こし始めた。僕は目覚まし時計代わりか！？

「そうよ

「だから、僕の心を読むなって言つて　じゃない。とりあえず、これ解いてくれないか？」

思わず強くツッコミそうになるのを必死にこらえながら精いっぱいの誠意を込めて脱出の手伝いを懇願する。『ううう所』も『普通の高校生なんだから手伝つてほしい時は頼む。

たつたそれだけの事をしただけなのに、彼女は僕を明らかに機嫌が悪そうな（・・・・・）目で見るや否や、こんな言葉を浴びせてきた。

「はあ？ 寝言は寝て言つてもらえる？ 何で私があんたを助けなくちゃいけないのよ？」

「なつ！？」

「いい、ここでハツキリと言つておくわ。私はね、あんたたち人間が大っキライなの」

さらに、手で『あつちい』のジェスチャーをする彼女に、流石の僕も堪忍袋の緒が切れた。

「ふ、ふざけんなっ！ 人がせつかく親切に起こしてあげようとした仕返しがこれか！？ 人間が嫌いだか何だか知らないけど、少しは他人を優しくすることが出来ないのかよ。もう分かった、お前の助けなんて絶対借りないからな！！」

じゃあ勝手にすれば？ という言葉と共に去つていく彼女を眺め

ながら、脱出の手段に頭を働かせていた。

*

「や、やつと出られた……」

「…………お疲れ様」

あれから三時間後、いつになつても下に来ないことを心配したフルフラスに助けてもらつた僕　芹は、足が地面に付いてる事のありがたみを味わつていた。

「全く、酷い目にあつたよホントに」

未だに残るあの女への呪詛のように怒りの言葉を呴きながら、リビングとフローリングの廊下を隔てるドアを開ける。するとそこには十帖ほどの、奇々怪々な置物がそこら中にある以外は一般家庭と何ら変わらない空間が目に入つてきた。いつも見る光景なのに、随分と久しぶりに見た様な感覚がするのは氣のせいだと思いたい。

「…………あまりマリーを怒らないで欲しい」

リビングに入るとすぐに、いきなりフルフラスが頭を下げてきた。「ど、どうしたのいきなり？」

突然の反応に戸惑う僕。

「…………芹があなつたのは、彼女が寝起きが悪いことを伝えなかつた私の責任。普段はあんなことはしないから」

無表情な顔のまま申し訳なさそうに理由を話すフルフラス。いい子だなあ……。

「いや、君が謝ることはなによ」

僕は、そんな彼女の頭を撫でながら優しい口調で諭すように言つ。「でもね、いくら本心じゃなかつたとしても謝らなきやいけないことは謝るべきだと僕は思つ。だから、彼女が謝つてくるまで僕は許す気はないよ」

どんな理由があろうとも、悪いことをしたなら直ら『悪い』って言われるまでその相手を許しちゃいけない、そこは搖りいぢやいけない、と言われたのは、口クでもない両親の数少ないマトモな教訓

の一つだ。

「ま、そのうち分からせるつもりだけね。……さて、遅くなつち
やつたけど朝食にしようか。何作つて欲しい？」

ひとしきり言いたいことを伝えた僕は、その場で大きく伸びをしながらキッチンに向かいリクエストを訊く。するとプルフクラスは首をゆつくりと横に振り。

「…………いい」

彼女にそう言われふと洗い場を見ると、確かに水を張つた桶に、いくつもの食器が沈んでいた。

一体何を作つたのかは分からないうが、少なくとも“誰が”作ったのかは容易に理解できた。

恐らく調理場に使つた場所に移すと、そこには無残に放置された皮やら殻やらの姿。間違いない、あの女の仕業だ。

「うわあ……。あの女、本当に片づける能力が皆無じやないか。本当に」

そんなグチを言いながら、卵の殻を拾おうとした瞬間。

乾いた足音と共に、黒く光る『何か』が現れた。

「…………いやあああああつ……！」

僕、堪らず絶叫。そして家具の隙間へと消えるアンチクショウ。び、びつくりした上に、戦慄すら覚えた。未だに響く特有の乾いた足音が、尻もちをついている僕の背筋を寒くした。

「…………どうしたの？」

危険生物の邂逅から数秒して、プルフクラスが僕の近くまでかけ寄つてくる。何があつたつて顔だ。

僕はそんな彼女の両肩を、震える手でガツチリ掴むと。

「あ、現れたんだよ。ついに僕の家にも。あの、三大危険生物が

「…………は？」

何が起きたのか分からず、キヨトンとした表情の彼女に僕はさらに続ける。

「いいかい？　この国には……いや、世界には三大危険生物がいるんだ。

素早さの黒（俗に言つG）

攻撃の黄色（蜂）

重量のこげ茶ムカデ

という名前で恐れられる存在がいるんだぞ」

すると、彼女は何か見つけたのか、視線を逸らし右手を動かし。

「…………もしかして、これ？」

親指と人差し指で、カサカサと動く生命体をこじらせて向けた。

「ひ、ひいいいいいっ！！」

僕、再び絶叫。そして、そのままの姿勢で後ろで全力ダッシュ。

「…………」

ブルフラスはそんな僕と素早さのアイツ（僕命名）を交互に見た後、おもむろに窓を開けてそいつを投げ捨て、素早く閉めた。

「…………」

僕らの間にゆっくりと満ちる静寂。

最初に口を開けたのは、あつちだつた。

「…………虫、怖いの？」

「…………はい」

その後再び嫌な空気が流れたのは、言つまでもない。

喧騒 - - 五日早朝（後書き）

今回は一回に分けてお送りする形になります。

ヤバ、こう書いてるとフルフラスが可愛く見えてきた。こんなハズ
じやなかつたんだけなあ……。 次回も鯨井家の朝が続きます。

何時になつたら戦闘できるかなあ……？

疑問・・五日朝（前書き）

投稿が随分と遅くなりました。今回は反省しています。

楽しみに待つていた方、どうもすいません。

そして、その割には文章がダメダメなことも温かい心で許してください。

それではどうぞ。

「そういえばあの女、どこいったんだ?」

あの騒動から数分後、冷蔵庫にあつた残飯を使つて遅めの朝食を食べ終わつた僕 芹は、向かいのソファーに座つてゐる幼女 プルフ拉斯に訊ねた。

「……………多分、マリーは、部屋に、戻つて寝てると、思う」再び無機質な表情でこっちを見ながら彼女は応える。因みに今、彼女は間食としてステイックパンを食べている。多分、『電動スティックパン食べ機』とかあつたらこんなのだろうな、と思わず考えてしまうぐらい絵になる光景だ。

「寝てるって……」

予想はしていたけど、その通りの返事に思わず溜息が漏れる。あの女本当に昼夜逆転してゐるんじや。

「……………そういえば今更なんだけど、マリーってもしかしてあの女……じゃなかつた、アンドロマリウスのこと?」

頭に浮かんできた疑問を目の前の電動パン食べ機に訊ねると、プルフ拉斯は一瞬呆然とした後に首肯する。

「……………うん、そうだけ。今更?」

「うん、今更」

またもやポカーンとした表情を浮かべるプルフ拉斯。

「……………どうしてそんな事を?」

「いや、単純に気になつたからだけ……」

「……………そう、分かつた」

彼女はそう言つて頷くと、その理由を語り始めた。

あの女 アンドロマリウスの本名は、この名前ではないらしい。

彼女達が話す“ソロモン七十二柱”というのは個人名ではなく、あくまでも『種類名』。つまりは『家族名』に近いものだというのだ。御家柄とか言うものなのだろうか?

「つまり、あの女には“アンソロマコウス”って名前以外の名前があるってことでいいんだよね？」

「…………そづ」

「あつさり首肯。

「じゃあ本当の名前ってなんなの？」

「…………知らない」

「今度はあつさり否定された。

「知らないって、君達は『仲間』じゃないの？」

「…………そう、私達は仲間」

「じゃあ何で」

「…………けど、仲間の事を全て知っているほど仲じゃ、ない」

「そんな言い方しなくても……」

「…………じゃあ、芹はある一人の全てを知っているの？」

「う…………」

図星なところを突かれ、思わず言葉に詰まる。

「…………それと同じ。どんなに仲が良くても知らないことはたくさんある。それを認めながらお互いを知っていくのが、本当の付き合いだと思う」

さりにフルフラスがこれでもかといわんばかりに畳みかける。うう、全てが正論すぎて入り込む隙間が全く見当たらない。こ、これが悪魔の実力か……。

「…………う、じめん。僕が悪かった」

「…………何で、謝つてるの、芹」

「う、う、じめん。分かったからもう、いいかな？」

「…………？ 芹が止めたいならいいけど」

僕が止めるように懇願すると、彼女は小首を傾げながら、そういうことだから、と最後に言い残して話すのを止めてくれた。良かつた……。彼女達の腹の中を探るのは、今は止そつ。

「じゃあ、次の質問にいつてもいいかな」

「…………？ 別に構わない」

相変わらずの無表情に戻ったプルフ拉斯がこつちを見ながら応える。か、可愛いや、こつちは重要な話だ。気を引き締めろ、僕。「ずっと訊こいつと思つたんだけど、僕達は何をすればいいのさ？」
その気迫を察したのか、彼女の表情も真剣な雰囲気を漂わせ始める。

「…………聞いて、なかつたの？」

あれ？ もしかして怒つてる？

「い、いやちゃんと聞いてたよ。嘘じやナイヨ？」

い、いかん、語尾が片言になつてゐる。うつ、プルフ拉斯の目が

疑いに満ちてるよ。

「…………”鍵”の役割は、私達ソロモン七十一柱の能力を使い、封印する事

「そこだよ。能力つて何さ？」

「…………能力は、私達が個別に持つてゐる力」

「能力、…………」

そう言われて、ふとあの女の事を思い出した。

真紅に輝く、『何か』を見抜く瞳。

あれも彼女の言つ『能力』なのだろうか？

そう考へると、僕達は何かやらなきやいけない気がしてきた。そ
この所も訊いてみなくては。

「…………大体言つてることはわかつた。それで僕達が出来ることつて
何かな？」

「…………特にない

「…………」

「…………」

「…………」

「…………ツツコんで」

「あ、ごめん」

まさか彼女の口からそんなオチが来るとは思わなかつた。

「…………でもほとんど何もしなくてもここのは、本当」

「え？ どうこいつ」と？」

「…………“鍵”の周りには、禍が起^{わなわな}る、から

「禍……？」

そう、と頷いたフルフラスの田^たは、こつものよつに一切の感情が消えていた。でも、どうしてか、その感情に違和感を覚えた。僕がそのことに追求しようとしたその時。

「あー、騒がしいわね。さつきかひ」

わつせと同じパジャマを着たあの紅髪少女が、眠氣眼^{まなこ}をこすりながらコンビングに入ってきた。何て見事な空氣殺し（ヒア・ブレイカー）。

「…………」「

「…………何よ？ 変なものを見るよ^{うな}田^たは」

この壊れた雰囲気をまるで物ともしない態度に思わず呆然としている僕らをよそに、彼女はスタスタとキツチンと向かひ。

「…………何、あれ」

「…………多分、寝起きの事は覚えてないんだと思う

そんな彼女に気付かれないように隣のフルフラスと小声で緊急会合。やはり悪魔^{アーチ}というのは朝に弱いものなのだろうか？

「さて、何を作ろつかな…………？」

包丁を握りしめ腕まくりしながら、食材を前にする紅髪少女。改めて確認したがやっぱりあの女が作ってみたいだ。

とんとん。

ぱいっ。

とんとん。

ぱいっ。

とんとん。

『じゅっ！

僕はリモコンをブン投げた。

「何すんのよっ！」

「堂々と飯を作り始めるな

っ！..

「一体どういう神経してやがるんだこの女。まるで傍若無人を絵に
かいたような行動しやがって。

「しかも切った食材を床に置くな！ 貴様の辞書には『片付ける』
という言葉はないのかっ！」

「ひるさいわね。私がここまでしてるんだから、むしろ感謝して欲
しいぐらじよ」

「部屋を汚されて、感謝する人間がどこにいる！？」

「家事をしてるんだから、お、多めに見てくれたつていいじゃない」

「それとこれとは話は別だ！」

「ああもう、だから人間は嫌いなのよー」

「何でそういう話になるんだよ？」

「そりゃあんた達が私達を

ふいに、彼女の言葉が途切れた。

「私達を……、何だよ？」

すぐさまそこに突っ込むと、な、なんでもないわよっ、とはぐら
かされ、彼女はそのまま料理を再会し始めた。

あまりに露骨な話の逸らされ方に、深く追求しようとした瞬間
。

「スト ップ！」

僕は待ったをかけた。

「こ、今度は？」

身構える紅髪少女。そんな彼女に向かつて僕は声高にひと言った。

「お米のとぎ汁を、流しに捨てるなつ。それはサボテンちゃんのお水なんだ！」

「「」」

瞬間、世界が止まった。……かのように思えた。

何故だろう、何かものすごい間違いを犯した気がする。

「……私、あんたがあの中で一番まともだと思つていたけど、大した差はないことが今分かつたわ」

「……サボテン」

アンドロマリウスの哀れむような視線がすごく痛い。

「な、何を言つてるんだ。そんなワケないじゃないか。ねー、サボテンちゃん」

「あんたさあ、今自分の姿を一度鏡で見た方がいいわよ」
かるうじて残つたとぎ汁をサボテンにあげてみると、今度は呆れた声が聞えてきた。

「つ、サボテンちゃん、皆が僕をいじめるよ」

「……あんた友達少ないでしょ？」

「何を言つ。ちゃんと友達ぐらいいるよ」

「あの一人を抜いて」

「……い、いるもんつ」

「今の間は何？」

「……齋だろ、齋だら、……齋だら……」

「思いつきり一人だけじゃない」

「そ、そんなことないやいつ！」

「目から出るのは何よ……」

あれ、目から汗が止まらないや。

「……なずな？」

瞬間、思考が止まる。

続いて、背筋が凍りつくような感覚に襲われる。

「わ、忘れてた……っ」

「どうしたの？」

「齋が……、齋が来るんだよー。」

刹那、家中に響く呼び鈴の音。

次いで、聞き覚えのある女の子の声。

間違えなし 徒然抄

「あからさまに慌て始めたわね」とととと、「よし!」

そりや そうだろう。幼馴染の両親容認の世話役に、自分の世話対象が女の子を連れ込んだなんて知れたら僕に何かしらの被害が及ぶことは必至。下手をしたらあの両親に連絡されて、仕送りを止められるかもしない。まさに死活問題。^{ネット・オア・アライフ}

そう決めてからの僕の行動は早く、神速の如き速度で紅髪少女の手を掴みリビングを出ようとした。

当の彼女は、僕の気持ちを全く感じていなかのように拒絶反応を示す。まさかこの女、僕の状況を理解した上でこの行動に出てやがる……？

『芹、入るよ』

玄関の方から、扉を開けるような音。ここに来るのも時間の問題

た
やハイ
マジでやハイで

「頼む、今は隠れていてくれ！ やるべきの事を怒り切っているなら謝る。」

それでも動いてくれない彼女に、僕は半ば強引に引っ張ろうとした

た瞬間

「知らないわよそんな事！」離しながらさう言つて言つてんのよ！」

彼女の空いた手に握られた黒鈍色の何かが、僕目がけてしなるように向かってくる。あれは 鞭？

「 うわわっ！？」

僕が驚転の声をあげると、左腕が頬に向かって動いたのはほぼ同時。

一瞬の交差。そして、左手の甲に鈍い痛みが進る。

「！？」

「痛つたいなあ」

勢いよく弾かれた鞭を掴み、素早く引き寄せる。こんな危険なものはボツシューートだ。

が。

「きやつ」

あまりに強く引きすぎたのか、何故か彼女まで一緒にこっちに向かっていた。ちょっと待つて、この勢いのまま突っ込まれたらバランスが崩れる気が。

と思つてゐる時には、僕はリビングのドアに頭を強かに打ちつけていた。

そして、その上には例の紅髪少女。

「何！？ 大丈夫せ…………り」

その音を聞きつけた齋がドアを勢いよく開く。

邂逅。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

長い沈黙。

「…………」

「…………」

「えーっと、これはー」

「…………」

「……なななーなな、なななななー」

「落ち着いて齊！　“な”の旋律がチャルラになつてゐるよ」

「な、な、何してゐるのよ芹つー！」

「あ、落ち着いた」

「いよいよ、この機会に、おもてなしの心を磨きたい」と、心を決めていた

「うー、誤解しちゃうぞ。」このお嬢様は二度と

僕は真上でよいつやく落ち着きを取り戻した齋に向かって、『どう

どう』となだめるジャスチャ―をしながら必死に誤解を解こうと試みた。両親に見放されたら、僕は生きていかない!

「へえ……、故意じゃないなら何なの?」

するとその思いが伝わったのか、彼女がいつもの調子で訊き返し

てくる。よしつゝ、まだまだ交渉の余地はあるかもしない（若干声

「故意じゃなくて、注意なんだ」

「余計に悪いじゃない！！」

やつてもうた

「どうあれ、義母さんと連絡するから」
おかあ

「止めてっ！ 僕の生命線がっ！！ って、本当に携帯持つてゐる。

「あ、もっもっ董さん？」

「うわああああ、助けてプルフルス。薙を止めて！」

「…………早起きをせねばいけない…………」

「もう嫌だ

この事態を收拾するのに、かなりの時間を消費した」とは言つまでもない。

もう嫌だ、こんな生活。

疑問 - - 五日朝（後書き）

……今度からは、早めにあげられるように根性に鞭打つて頑張りたいです（泣）
これから先の予定がいっぱいですけど。

第一回スマイルス会議・・五日目（前編）

なんとなくですが、体内時計ができあがつていってるよつたな気がします。

毎週水曜日～金曜日の間で出しつづける、そんな気がする。

この調子で頑張つてこいつと戦います。

第一回ファミレス会議・・五日毎

「「「トレードを要求する（しな）」つづー」「」

うだるような太陽の熱視線がさんさんと降り注ぐ昼下がり、僕
鯨井芹たちは辺りの人達など物ともせずに、大声で、声高に、寸
分の狂いもなく言い放つた。

直後に、突き刺さるような視線の嵐。

「……まあ、座ろつか

「……そうだな」

「……異議^{どひい}」

座席に着き、水を一杯仰いで気持ちを落ち着かせる。

僕達がどうしてここにいるかと云ふと、あの後何とか誤解を解いた僕が何気なく打つた。

『「こんな生活もう嫌だ』

の一言を、ダメ元で一人にメールを送つてみたところ、意外にも
あっさりと集まることになり、現在に至る。

「まさか僕達全員が集合するなんてね……」

「俺は薄々思つてはいたがな。菰はあんなどし、お前は自称『普通』
な人間だからな」

「そういうお前は、何でここに来たんだよ

僕がそう訊ねると、奴は大仰に頷きながらこいつ言った後

「決まつていいだろう。お前らの悪魔を俺が貰いに来

「「じゃあ、お願ひします（しません）」」

「…………すまん、悪かった。それだけは勘弁してくれ

全力で土下座した。

「それにしても“非現実”好きのお前が、テーブル席に座つて全力で土下座するのを見る日が来るなんてね……」

「ああ、流石『悪魔』の名は伊達じやねえな」

「…………そう思わない（おもひ）」

再び座りなおす萌と、その隣で力強く首肯する菰。僕はそれを見て、ふと疑問が浮かんできた。

「この二人は、一体どんな仕打ち もとい、時間を過ごしたんだら、ひ……？」

「…………ひしてか、お前の顔に『この二人はどんな仕打ち もとい、時間を過ごしたんだろう？……？』つていつ風に見えて仕方ないんだが……」

ふと気が付くと、萌が僕の顔を訝しむように見つめている。

「はつはつは、何言つてるんだい？ 僕がそんなこと考えるワケないじやないか」

「…………そうか、すまん。ちょっと人間不信に陥るよつな」とがつてな」

「『仕打ち もとい』なんて考えてナイヨ？ ホントダヨ？」

「あからさまに片言じやねーか！ つてか本当に考えてたのかよつ！」

「つるさい人の心を読むな！ 一次元慣れ爆発しろつ！」

「何だと…」

「…………つ！？ 賴まない（む）！… 騒げ（しずかに）！つ！ 奴が来ない（くる）！…」

いつものような諍いにならうとした途端、菰が今までにない剣呑な表情で僕達を止めに入ってきた。その瞳には明らかに焦燥の色が浮かんでいた。

なんて思つていた瞬間、僕達はテーブルに叩きつけられるよつて、たゞ

頭を下げるせられた。

思わぬ展開に困惑していると、低い声が耳元で囁くのが聞えた。

菰の声だ。

「…………騒いで（しづかにし）てくれ……っ！」

何のことか分からぬが、今見える範囲の視界を全部使ってファミレスの外を眺める。

するとそこには、必至の表情で誰かを探す、セーラー服の白髪少女の姿が田に入つた。

じりやり、こつちに向かつてきて 。

「 「 「 「 「 「 「 「

そして、僕達との距離を近づけていく。その距離は五メートル、四。

「 「 「 「 「 「 「

三メートル、二、一。

「 「 「 「 「 「 「

二つ一？」「

瞬間の交差。

そして、深い安堵の溜息。

それをたつぱり七秒ほどした後、最初に口を開いたのは萌だった。

「 つたく、他人事のハズなのに、こつちまで緊張したぞ

「 善意は、ある（ない）」

「 そんなの、お前の顔見れば分るつつの、菰つち

「 ……悪くない（わるい）」

「 でもさあ菰、セエレ（あのこ）つてそんなに怖いの？」

僕がふと頭に浮かんだ疑問を口にすると、菰の隣にいた萌があからざまに『はあ？』といわんばかりな表情でこちらを睨んだ。

「あのなあ、怖くなかったら」「ここまで焦らねえだろ?」

「そ、そりゃそうだけど……」

「……この言つことは、全面的に信じる根拠にしてはあまりにも物証に欠けるので、直接本人に訊くと、彼は首肯をするが。

「……いい子ではない」

とんちんかんな答えについつい頭を捻る僕。

「えつと、どうこうこと?」

「お前も分からぬ奴だなあお前も。それぐらい分かれよバカ。歴史バカ」

無性にこいつの顔をぶん殴りたい。

「……じゃあ一体、どうことなの。崩」

握られた右手を震わせながら訊ねると、決まってんだろ、と言葉を切つた後、菰を一瞥。

「It's a」

「「眞面目にやれ（やるな）」」

「……すまん」

そして、全力で土下座。……ダメだこいつ、早く何とかしないと。咳払いとともに、崩が答える。

「つまりだな、彼女 セエレは良くも悪くも純粹なんだよ」

そうだろ、とこいつが隣に話を振ると同時に、菰は静かに首肯する。

「何でそんなことが分かるんだよ?」

「ふつふつふ、それは内緒に決ま わーお、分かったから飼い主に捨てられた仔犬のような視線は止めてくれ、菰」

確かに、ここで秘密にされたらまたもんじゃない。彼にとつて数少ない彼女達の対策を知つてゐるかどうかは、まさに死活問題なのだから。

「あれ? それが分かる僕も、もしかして相当ヤバインじゃ……」

…？

「答えは文献だよ、文献。幸運なことにソロモン七十一柱の資料は豊富にあるからな、調べるのは簡単だつたぜ」

心に浮かび上がつた一抹の不安感に苛まれていると、奴が役に立ちそうな情報を提供してくれた。こういう対処法の探索の早さは、この男の数少ない優れた能力だと思つ。

「じゃあそれさえ調べれば、彼女達がどんな人物か分かるつてこと？」

「まあ、大体な」

「へえ……」

まあ、あの紅髪少女がどうこう風に書かれているかわからないけど、多分おおよそ間違いなく悪いことが書かれているだろ？

「嫌だなあ……」

「どうした？」

「いや、先を思つと気が重くな」

「あ、ハンバーグ定食にしようかなー」

「人の話を聞け。僕も菰も不安なんだ」

まあそんなにカツカスんなよ、とメニューを開きながら呑気に答える崩。

「今は焦つたつて仕方ないだろ？ 確かに菰の境遇には同情しなくもないが」

「僕にはないんかい」

「お前のなんか大したことないんだろ？」

「言つたな！ じゃあ僕が今朝どんな目に遭つたか言つてみろ」

「いくらこいつでも、今日僕がどんな目に遭つたかなんて当てられるワケがない。

「そうだなあ……、少なくとも誰かを起しそうとしたらその床に転がつてた拷問器具に引っ掛かつて、三時間ほど放置された程度のことはやつてると思つ」

「そんなこと……、あるわけ……つ

自分のあまりに扱いの悪さに涙が出た。

「まあ、それは冗談として」

「冗談じゃないんだけどね……」

「お前の場合は、何があつても大丈夫だろ」

何を根拠に、と言葉を紡ごうとした瞬間、僕の目の前に崩の右拳が迫った。

「お前、確か武道をやつてんだろ?」

「…………まあ」

確かに、僕は武道というものをやつてはいる。けど、それはあくまでも『かじつた』程度でしかない。これは親父が、『考古学者たるもの、見聞が狭いことは命取り』という考えの持ち主で、そのせいでなまじ中途半端に武道というものを教えられた。こっちの方が命取りだと思うのは僕だけだろうか。

「それに、最初にそういう目に遭うのは大体お前だし、何その根拠のない自信。しかも被害者は僕かよっ!」

…………と思いながらふと崩の方を見た瞬間。

「そういうことだ。今はのんびりし」

「…………見・つ・け・ま・し・た・よー」

やんわりとした声が、僕らの鼓膜を震わせた。

そう、崩の背後から現れたのは、菰が恐れているセーラ服の白髪少女。セエレだった一見ただけならば心が和むような笑顔をしているが、よくよく見てみると、背後に異様なオーラみたいなものが漂っている。確かに怖い。

僕は、そんな彼女を見ながら、同居人(パートナー)に同情の視線を送ろうとした時には。

「あれっ!?

彼はもう、姿を消していた。

恐らくいち早く危機を感じ取って、逃亡行動へと移行したのだろうけど、ここまで鮮やかだとどこかの忍者の末裔に見えてくる。

しかし。

「もお、御主人は恥ずかしがり屋なんですから」
彼女はそんな事にも動じる様子もなく、人差し指をピンと立てた右手をあげた。

「『渡国の徒は、玩具を欲す』」「ただそれだけなのに。

田の前に、逃げたハズの菰が現れた。

「え……？」

何のことが分からず困惑する僕や萌を尻目に、菰の腕に抱きつくる白髪少女。これだけ見ると羨ましく「ごめん、分かつたからそんな目をするのは止めて、菰。

（もしかして、セエレは“物を移動させる能力”があつたりする？）
（あれを見てれば分かるだろうが）

（でも、どうしてここが分かつたんだろうね。せっかくここまで行つたばかりなのに……）

「あらあら、そんなの“指輪”をしていれば意外と分かるものよ？」
「今まで迷惑だと思っていたけど、初めて役に立つた気がするわ」

「…………！？」

セエレに聞えないようにひそひそ声で話していたら、僕達にも何故か戦慄が進る。

振り向きたくない。死ぬほど振り向きたくない。

しかし、体は壊れかけのブリキのような音を（セルフで）出しながら、ゆっくりと背後を振り返る。すると。

「「やつと見つけた」「

やつぱりというか何というか。

そこに立っていたのは、ダンタリオンとあの紅髪少女に他二名が

揃つた、まさにオールスターだつた。

正面を見ると、崩も同じような顔をしているのが目に入ってきた。

そういうわけには一體何があつたのか。

「ねえねえ、また写真撮つたんだけど

「勘弁してくれよ。今月の小遣いが
つづけられぬ。」

「ショーガないじゃーん。だつて崩のお父さん、いっぱいカメラ持

つてんだもん

「だから親父に頼めつて……」

よ。……たんて話く前に分かっちゃつたにどりにあえず同情にする

困るの」「金」

まあ、僕も同じようなものだけね。

今日、僕達は一つだけ学んだことがある。だから、今はそれだけを心に刻もうと思つ。

『悪魔との生活は、みんな同じよつた末路を迎る』

そうして僕達は、自分達の相方に半ば引きずられるように帰路についた。

第一回スマイルス会議 - - 五日目（後書き）

前書きであんなこと口走りましたが、これからテスト期間に入るの
でしばらく出せないと思います。すいません……。
ああ、折角戦闘シーンにこぎつけると思ったのに……（泣）

邂逅 - - 五日 達魔が時（前書き）

テスト期間だからしばらく休みます。

そう書いていた時期が、自分にもありました。

そんなワケで原稿をあげたのですが、今回はずごく雑です。今まで
で一番雑かもしれません。その所を踏まえて読んでいただければ
幸いです。

邂逅 - - 五日 逢魔が時

日本では、多くの時間の呼ばれ方が存在する。

その中に、『逢魔が時』と呼ばれる時間帯がある。

その由来は文字通り『人ならぬものと出逢いそうな時間帯』。

そんな時間帯に、僕 芹達は『アイツ』に逢つた。

「 初めまして、になるのかな？ “鍵”を持つ少年」
あのファミレスの会合から数時間、齋との誤解を解き、口座から仕送りが途絶えないことに一人（あの一人もついて来ようとしてたが、流石に自分の預金を知られるのは嫌なので置いてきた）安堵していた帰り道。僕は背後から声を掛けられた。

誰もいなかつたことと、妙に聞き覚えのある単語に釣られて振り返ると、そこに美青年が立つていた。

漫画のようにさらりと長い金髪に、マリンブルーの双眸。整った顔に華奢な体型を強調する真っ白な修道服が、バックの沈みゆく茜色の夕陽によくマッチしていて、もし絵にしたら絵画に興味がない僕でも買いたくなってしまうほどだ。

「ああ、別に怪しいものじゃないよ。僕の名前はフランベル・ロイ・ディッシュ」

その男 フランベルと名乗る青年は、苦笑しながら、その美貌に違わぬ声音で。

「 じゃない祓魔師さ」
自らを嘲るように￥そつ言つた。

祓魔師。

言つなれば東洋における陰陽師みたいなものであり、悪霊に取り

憑かれた者をその悪霊から救済するのが主な役割として知られる。

しかし、どうしてそんな聖職者がわざわざこんなとこまで来て来たのだろう。

でも、その答えは単純明快だとこいつともすべに理解できた。

それは、たつた一つの単語。

「…………」

「どうやら、僕が…………いや、僕達が何なのか知っているみたいだね。話が早くて助かるよ」

フランベルはそんな僕を見るや否や、せっせと同じような苦笑を浮かべる。

まるで貼り付かせているような苦笑を。

「…………」

未だに黙秘を続ける僕。

これはあくまで僕の直感にすぎないけど。

この男は、危険だ。

何の根拠もないけど、何の証明もないけど、自分の中の警鐘が今すぐ逃げろと告げている。

「…………貴方達は、一体何が目的なんだ？」

「分かつてゐくせに」

未だに笑みを貼り付けたまま、僕を見るフランベル。その瞳は見るからに、冷たい。

「…………いや、僕じゃない（・・・・・）、か。

「…………彼女らを、僕達に渡して欲しいんだ」

『悪魔払い』。

それが彼らの別名だ。

「彼女…………ら」

不意に、僕はフルフ拉斯の言葉を思い出した。

『…………“鍵”の周りには、禍が起こる、から

もしかしたら、これこそが彼女の言つ『禍』なんだろつか？

今の僕に、それを確かめる術はない。

「何を躊躇う必要があるんだい？ 君は無理矢理、この戦いに参加させられているのだろう？ なら迷う必要性なんかないじゃないか」確かに、彼の言つことも一理ある。無理矢理戦いに巻き込まれたくないし、今すぐにだつて誰かに譲つてやりたい。けど。

「…………」

けど僕は、何も答えない。

「…………沈黙は、拒否の解答としてみなしてもいいのかな？」

沈黙。

「…………そうかい」

フランベルはそれだけを確認すると、昼と夜の境目の陽を見計らつたようなタイミングで右手を天高く挙げた。

「『汝が“か』』」

「ちょっと待つて下さい」

しかし、僕はそれに割り込んだ。

すると、彼は一瞬だけ冷やかな表情を垣間見せた後、再びあの笑顔を貼りつかせる。

「…………どうかしました？」

そして、全く悪びれもしない言い方をしてきたので、僕はハッキリと言つてやつた。

「いきなり何してるんですか？」

「だつて、君が僕の提案を拒否したから」

「…………人の意見を無視したら、拒否になるんですか？ 貴方の」

「…………口には気をつけた方がいい」

背筋が凍りつくような聲音。

「本来なら、君達 悪魔崇拜者^{サタニスト}の言つことなんて耳にも入れたくない」

どうやら彼の仲では、僕は話す価値のない人間だと思われている

みたいだ。

「でも、僕は寛大だ。精神が安定してなかつたといつ事にじといてあげるよ」

「……………“じつも”」

嬉しくない言葉に礼をしながらも、僕は続ける。

「……………質問しても、いいですか？」

「構わないよ」

じゃあ、言わせていただきます。と切り出しながら。

「貴方……………いえ、貴方達は、僕らから彼女達を手に入れて、一

体何をする気ですか？」

一番訊きたかったことを。

するとフランベルは、今まで見たことのないような。

「簡単なことですよ」

まるで恍惚といわんばかりの、爽やかな表情で　。

「“飼う”のですよ」

何の躊躇いもなく、言つた。

“飼う”。

たつたそれだけの単語を理解するのに、数秒の時間を要してしまつた。

いや、数秒間要しても、一向に何のことなのか理解できていない。どうことなんだ？……………ダメだ。いくら考えても分からぬ。というか、理解したくない。

「……………やっぱり、君には僕達の崇高な目的が理解できないようだね」

「目的？」

僕がそう訊き返すと、フランベルはこれが答えたと言わんばかりに右手を天高く挙げ。

指を鳴らす。

するとそれを合図にするように、一つの影が現れた。

それは 。

「 少女? 」

何かを引きずるような音を出しながら姿を現したのは、まいり
となく、人間の少女だった。

チョコレートのようなダークブラウンのセミロングに、大和撫子
を彷彿とさせる風貌。見た目はあの紅髪少女 僕達と同じぐらい
で、フランベルと同じ純白の修道服を身に纏つてゐるせいか清楚な印
象を感じさせる。

でも、おかしな所が三つほどある。

一つは、彼女の瞳が虚ろだということ。

もう一つは、その首についている厳つい首輪。

最後は、その首輪から伸びてゐる鎖が、フランベルによつて握ら
れていることだ。

「 もしかして……、まさか」

「 そういうことだ」

「 どうして……? 」

「 どうしてって、それは愚問だなあ。言つておくけど、僕達は祓魔
師だよ? 彼女ら ソロモン七十一柱や悪魔の偽王国のことを知
つていたつて不思議じゃないだろ? それに、いい加減彼女達と
のいたずらっこにも飽きたんだよ。 ここまで言えれば、分かるだ
ろ? 」

そこまで言られて、僕はようやく全ての合点がいった。

つまり。

この男達 悪魔払いは。

彼女 ソロモン七十一柱を文字通り“ 飼 ” い、利用して僕達

“鍵”を殺し、その後世界を破壊する危険分子として処刑する。これは僕の勝手な推論だが、フランベルの目を見る目的を得ているようだ。とびきりの笑顔をこちらに向けってきた。

それだけで十分だった。

「…………ふ」

「いつを殴り飛ばそうと思い至るには。

「ふざけんなっ！」

激昂と同時に、駆け出す。

彼我の十五メートル弱。近くはないが決して遠くもない距離は、たつた数秒経つだけで埋まる。

だが、フランベルはそんな僕に焦るそぶりも見せず言葉を紡いだ。
「『汝が鍵^{コマンドワード} フランベル・ロイティッシュの名を以つて 汝が鎖を解かん 封印解除“嵐雷の徒は、天地を穿つ”』」

すると、変化が起きた。

フランベルの言葉が紡がれると同時に、少女の髪の中から何かが生えてきたのが見えた。

角。

鹿のような、闘牛のような。そんな何にも似つかない角が彼女のこめかみ(・・・・)あたりから生え、ねじれ、歪んで止まる。

それと同時に、火花が散るような音。

「終わりだ」

弾かれるように音の方向を見ると、角に電流を迸らせる少女の姿。

狙いは 僕。

「《地這う紫電^{サンダーラス・ロンド}》」

「《正義の邪眼^{イーウィル・ジャスティス}》」

「《正義の邪眼》」

そしてその言葉を最後に、僕の意識は……途絶えた。

邂逅 - - 五日 邪魔が時（後書き）

段々中一っぽくなつていきますが、ファンタジーと中一は切つても
切れなものだと自分は思つております。
しかし、今度こそ……今度こそテスト期間に入るので、休む可能性
があることだけ了承しておいてください。

テスト機関の為、長い間ずっと投稿が滞ってしまって、申し訳ありませんでした。本当はもう少し早くあげるつもりだったのですが、思ったよりも執筆能力が落ちていたのでこのような時間までかかりました。あと、一言い訳したくないのですが、執筆能力の低下により少々文章が拙くなってしまっているかも知れないのに、温かい目で見てくれると幸いです。

目を覚ますと、そこは自分の家だった。

続いて見慣れた天井、安らぎさえ覚える毛布の感触を知覚する。

「一体どうして僕はここにいるんだろう……？」さつきまでフランベルと一緒にいたハズなのに。しかもよく見たら、服も着替えていた。

「一体、誰が……。」

「ようやく目が覚めたわね」

鼓膜を揺らした声は、僕が予想もしてなかつたものだった。

「目に入つたのは、燃えるようなワインレッドの長髪……」ポーティルじやなくておろしているけど。

「アンソロマリウスだった。」

「な、なんで君が……？」

ワケが分からず目を白黒させていると、彼女は持つてはいるタオルを絞りながら嘆息した。

「助けた張本人に、その言い方はひどいんじゃないの？」

「助けた？」

「そ、あの祓魔師からあんたをここまで連れて帰つてきたのは私」

「一体、どうやつ？」

僕はそこまで言いかけて、止まる。

「そうだ、意識が途切れる寸前に変な声を聞いた。」

『地這う紫電』
サンタリス・ロンド
『正義の邪眼』
イーウィル・ジャステイ

あの変な台詞は一体誰が？

そんなの考えなくても分かる。

「…………君が、助けてくれたの？」

「だから、そう言つてゐるじゃない。耳に穴でも空いてるんじゃないの？」

「空いてないと聞えてないけど…………」

むしろ空いてなきやおかしい。

そう思つて彼女を見ると、僕の予想に反し何も言わない。

部屋中に沈黙が落ちる。

少し静寂というものが苦手な僕が何か話そつとした瞬間。

「逃げなさい」

突然発された言葉に、一瞬理解が追いつかなかつた。

「一体彼女は何を言つて つ！？」

そこまで思つて起き上がろうとした途端、激痛が迸つた。顔を歪ませ腹の辺りを握るつていると。

「大人しくしてなさいっ！ あ、あんたこんな目にあつたんだから」そんな台詞がうずくまつた僕の頭上から響いた。痛みが治まつた頃にふと顔を見上げると、あるものが視界に映つた。

そこにあつたのは、真ん中に直径20センチほどの焦げたような大きな穴が空いた布地。

さつきまで僕が着ていた服だつた。

「何、これ…………？」

驚きを隠せず声を震える。

「一体、僕の身に何が起こつたんだ……？」

その答えは、意外にも早く返つてきた。

「…………撃ち抜かれた（・・・・・）のよ。文字通り、地這う紫電

に

信じられない言葉とともに。

撃ち抜かれた？

地這う紫電？

僕の中で彼女の言葉がリフレインし、一部の単語が頭の中で宙を

舞う。

あまりに衝撃的な事実に、絶句していると、隣からアンドロマリウスの声が聞えてきた。

「だから、あんたは逃げなさい」

それはいつも通り力強いのだけれど、顔を力なく伏せる。

「そして、あの子に……私達に関わらないで」

そのせいか、響いた言葉はあまりにも弱々しく聞えた。

再び訪れる沈黙。

「…………」

さっきよりも重々しくのしかかるそれに思わず話しかけようとして、止まる。

何を考えているんだ、僕は。この紅髪少女は、人様の部屋に堂々と物騒な代物を散開させた上に引っ掛けた奴（僕）を放置し、拳句の果てに三大危険生命体を我が家に呼び込んだ張本人だぞ。けど。

「…………話してくれないかな？」

けど、彼女をほつとけない僕は、どうやら随分なお人好しなのかもしれない。

「何ができるか分からぬけど

だつて、見えちゃったから。

「そんな風に泣かれたら、ほつとけないじゃないか」

頬をつたう、一滴の涙を。

「…………」

しかし、彼女は顔を伏せたまま黙つたままで、一向に話そうとする様子はない。

「言いたくないなら別にいい。けど、これだけは訊かせて欲しい。どうして僕が逃げる必要があるのか、そして……君の言う『あの子』が誰なのか」

何も答えてくれないなら、せめて現状だけは把握しておきたい。すると、彼女は重々しくその口を開き、言葉を紡ぐ。

「あの子 フルフルはね……私の親友なの
「え？」

彼女の意外な台詞に思わず素つ頓狂な声をあげる僕。勿論、あの子に名前が某怪物狩りの竜だったことに対する驚きではない。「はは……っ、そうよね。私みたいな女に親友と呼べる存在がいたことの方がよっぽど驚きかしらね」

自嘲するように小さく笑うアンドロマリウス。真っ赤になつて否定することもできただけど、今はそりきじてられないので沈黙を通して否定する。彼女は続ける。

「でも私とあの子は、小さい頃からの親友……ううん、唯一無二と言つても過言ではないわ。……それが仇になるとも知らずにね」

「一体何の」

そこまで言いかけたといひで、僕は自分の浅はかさに気付いた。

悪魔の偽王国。

世界を滅ぼそうとする悪魔とそれを封印する“鍵”たちの戦い。歴史上にこれが起つていたとしたら、避けて通れない事が一つある。

特別な力を持つ者存在による、力の奪い合い。

人類が今まで何回も起こしたことだ。きっと彼女 アンドロマリウスたちもそんな争いに巻き込まれた者の一人なんだろう。「悪魔の偽王国」のことを聞いて思わなかつた？ 私たち ソロモン七十一柱は、ただの『道具』よ。“鍵”に利用され、封印されるだけの、「

嘲笑しながら言葉を切る。

「……条件が同じ所は前よりはマシだけ、どうしてもこればっかりは耐えられないのよ」

自分の手で親友を痛めつけるのは。

震えた声音でそう言ったのを、僕は聞き逃さなかつた。

その気持ちは、分かる。僕だって萌や菰と命を賭けて戦えと言われたらとてもじやないけど精神が保てる気がしない。それを僕達と同

じぐらいの、しかも女の子が背負うんだ。その重みは察して余りある。

だから 。

「 僕は逃げて、か

ぼそりと呟く。

…………うん、覚悟を決めた。
やるべしとは、一つだ。

「 「めん

僕は、彼女に向かつて頭を下げた。

「 へ？」

今度は紅髪少女が素つ頓狂な声をあげる番だった。
「 僕は君のことを誤解してた。ガサツで自分勝手で、悪魔みたいな
ヤツだと思つてた」

「 ……私、本物の悪魔」

「 とにかく！」

僕は身を起こして彼女の方に向き直る。まだお腹の辺りに激痛が
走るけど、これくらいなら大丈夫。

「 僕は、君と一緒に戦う」

“ 鍵”としての使命なんてワケの分からぬことの為じゃないし
。

悪魔の偽王国という、バカげたものの為でもない
。それはもつと簡単で、強い理由。

「 君と、君のたつた一人の親友を助ける為に

そう言つて彼女に手を差し伸べた僕は、一体どのように見えるの
だろうか。

人の道を外した悪魔崇拜者^{サタニスト}？

身の程をわきまえない無謀野郎？
綺麗ことを言つキザなヤツ？

別に何だつていいや。

「…………

彼女 アンドロマリウスは、差し伸ばした僕の手をキヨトンと
した目でしばし見つめた後。

「あんた、バカじやないの？ 人が折角忠告したのに。けど
いつも通りの調子でそう言って。

「 けどそんなバカ、私は嫌いじやないわ」

今まで見せたことのない笑顔で僕の手を掴んだ。

祓魔師あいくつじをぶちのめせるなら。

自宅にて 五日夜（後書き）

皆さまに重大なお知らせがあります。

今作は、あと一話ほど書いた所で終了します。
ですが代わりに、二作投稿することにしました。

一つは、今作の続編『現代召喚者のススメ？』変人はアクマを救うモンだぞ』。主役の三人組の中で一番の変人 萌くんを中心とした全体的にコメディにするつもりです。

もう一つは、オリジナル作品『取扱い「ゴチュウイ！？」その少女は一触即逝します』。まだまだプロットの段階ですが、コンセプトは『史上最弱のヒロイン』を田指して行こうと思います。
詳しい投稿日時は、後日ということで。

戦闘・・五日夜（前書き）

お久しぶりです。やつくりと数えて一ヶ月ぶりになります。学校の文誌やらで進行が遅くなってしまってごめんなさい。でも五つ同時に進行は本当にキツいものがあります。もう一度とやりたくないです。

戦闘 - - 五日夜

「やあ、また会つたね。“鍵”の少年」

町外れの廃工場。

僕 芹達と彼 フランベルとの一度目の出会いの場はそこだつた。

「思つていたよりも早い再会で、僕は嬉しいよ」

相変わらずの薄っぺらな笑顔を貼り付けたまま語りかけてくるフ

ランベル。

「本当だつたらこっちから君達を招待しようと思つていたのですが

……」

「アテが外れたね」

予想外と言わんばかりの表情のアイツに対し、僕は挑発的な台詞をかける。

しかし、フランベルが纏う雰囲気は別の物を漂わせ。

「そう言つことですか。これで僕は卑怯な手を使わなくともよくなつたわけですね、ふふふ……」

そして次の瞬間、歓喜に近い高笑いが工場中に響き渡つた。やっぱり、もう気付かれてるんだろうか。

僕は込み上げる動搖を押しこめながら、平然を装つて訊く。

「何がおかしい？」

「何がつて？ もう分かつてるくせに」

すると、フランベルは仰いだ顔にこぢりに向かた。

そこに不敵な表情を映して。

「 その悪魔の能力を使つたね？」

まるで大義名分でもできたと言わんばかりに。

《正義の邪眼》
イ・ヴァイ尔・ジャステイス

それが彼女 アンドロマリウス……いや、マリーの能力。とっても分かりやすく言うと、見たものの『属性』のようなものが見抜くことができるといふ。仕組みはよく分からないけど、彼女がフランベル達にある『属性』を頼りにここまで案内してくれたから僕は迷わずここに来れだし、フルフルに撃たれても大事には至らずにすんだ。

でも、そのせいでも彼女の能力もわざわざしてしまった。けど、僕達も相手の能力の正体は分かっている。

『地這う紫電』
サンダラス・ロンド

マリーが説明する限りだと、大気中に存在する電荷を操作して文字通り雷を『這わせ』てくるのだという。だが『這わす』と言つても地面上に着いたら意味がないので、自分の周りに電気を溜めて発射させるのが主な攻撃方法らしい。これだけ聞くと遠距離戦にしか強くないイメージがあるが、接近しても溜めた電気がバリアーの役割をするので隙がない、と彼女は言つ。

「感謝するよ。これで僕は、君達を遠慮なく叩き潰せる」

徐々に表情が不快なまでに歪むフランベルを見てマリーが呟く。
「あそこまで行くともうダメね……。反吐が出そうなぐらいの祓魔^{エクソ}主義^{シズム}よ。もう頭の中は悪魔^{わたしたち}を殺すことしか入つてないわ」

目の前の男からひしひしと伝わる、狂気に満ちた空気。

本当に今のコイツなら、何の躊躇もなく僕達を殺すかもしれない。そう思えるくらいフランベルの顔は醜悪に染まっていた。

一触即発の空氣。

僕はある理由（親父のせい）で他人よりも殺氣じみた雰囲気には慣れてるけど、こんな気分の悪い空氣は生まれて初めてのような気がする。できる事なら今すぐに逃げ出したいなんて思つたのはこれが初めてかもしない。

逃げるわけにはいかない。
けど 。

「……本当にこんな方法しかないのかな？」

つい本音が零れおちる。

確かに昔はそんな事もあつたかもしない、過去は変えられないかもしない。けど今は変えられる、わざわざ過去を繰り返す必要なんかどこにもない。

未来はえる」とが出来るのだから。

しかし。

「無駄よ」

そんな僕の気持ちをピシャリと遮るように、マリーは言い放つた。「相手が好戦的でしかも戦闘態勢を取つた以上、じつに話を聞く気なんてないわ。そんな相手にそんな事を言つても無駄」

それに、と彼女は言葉を切ると。

「私は、この男を許す気、ないから」

ゾツとするような声と共に、持つてきたトランクから何かを取り出した。

直後に、堅い何かが弾かれるような音が沈黙を切り裂く。……つて鞭！？

「いいねいいねその目だよ！ 僕が求めてたのはその剣つるぎみたいな冷たい目だよ！！ 彼女の言う通り、僕達はやはり戦うべき存在なんだ！ 話し会いなんてムダさ！ こうして君達が来なかつたら無理矢理にでもするつもりだつたからね」

それを見たフランベルが、今度は恍惚こうごと言わんばかりの表情で僕達を見つめて叫ぶ。

…………ん？ 今何か変なことを言わなかつたか？

「…………『無理矢理』でも？」

そう言えばさつきも、卑怯な手段とも眩いでいた気がしたな。

「ん？ 簡単なことだよ」

その声が聞えたのか、フランベルがあっけらかんとした声音で応える。

「君が僕をブチのめしたくなるような状況を作るんだよ。例えば……」

： そうだね、君の幼馴染
ナズナつて言つたかな？ あの子にち
よつとばかりオイタ（・・・）しちゃうとか。お友達のあの“鍵”
の一人を惨たらしいやり方で殺しちゃうのもいいかな？ それから

「もぐら」

自分の中の何かが、音を立てて壊れていいくのが分かつた。
「その減らす口、今すぐ呑けなくしてやる」

キッと田の前を睨めつける。そこには

親父、ごめん。ちょっとだけ約束を破るよ。

それを見たフランベルが、恍惚とした聲音で呟く。

「行くぞ」

その会話が、開幕の合図だった。

*

「『汝が鍵 フランベル・ロイディッシュの名を以つて、汝が鎖
を解かん。 封印解除 ワード』『嵐雷の徒は 天地を穿つ』」
「『汝が鍵 クジライセリの名を以つて、汝が鎖を解かん。 封印
解除 ワード』『正邪の徒は、世界を見抜く』」

互いに言葉を紡ぎ、赤銅色の指輪が輝かしいまでの光を放つ。それと同時に紅髪の少女は双眸を真紅に染め、黒茶髪の少女の足元に金色の円陣が浮かび上がる。

『地這う紫電』 サンダラス・ロンド
『正義の邪眼』 イーヴィル・ジャスティス

の間隔では、同時

「ああっ！」
駆け出す。

先のことなんか何も考えない。自分でも思いつきつと言つていい
ほどの力で地面を蹴り上げる。

「ははっ、また雷撃に撃ち抜かれたいのかい？」

しかし、そんな僕の行動を嘲笑うように……いや、嘲笑うフラン
ベルの足元にもフルフルと同じ円陣が浮かび上がり、数本の雷撃の
鞭が蛇の如くしなり、うねる。恐らくあれが僕を撃ち抜いたものだ
ろ。確かにここまま行けば、僕は夕方の二の舞になることは必至
だ。そう思った僕の頭に、ここに来る前にマリーの一言が蘇エクソシストる。

『戦うことになつたらやる事は一つよ。アンタがあの祓魔師に突つ

込んで叩く。それだけ』

最初は流石に戸惑つた。

『だ、いじょうぶ、私を信じなさいって』

そんな僕を見た彼女は、悪戯な笑みを浮かべたのをよく覚えてい
る。

『私は、ソロモン七十一柱よ』

「右ツ！」

声が、届いた。

弾かれるように右に飛び退くと、何かが駆け抜けしていくのが見えた。

雷撃。

恐らく数瞬間前の僕の心臓を狙つて放たれた金色の閃光を眺めて
いるが、フランベルが思わずといった感じの声をあげる。

「……っ！？ 今のが見えた（・・・）……だと？」

「下ツ、右ツ、上ツ！」

次々に届く言葉に従つて体を翻し、捻り、躰す。そして一刹那後
に、彼女の言う通りの場所に閃光が空を裂く。

「アンタの攻撃くらい、私の目で丸わかりよ」
そして挑発的な一言に、突然フランベルはトーンを落として、啖く。

「……じゃあ、これは避けられるかな?」

すると、奴の周りにある魔法陣から、数十本にも及ぶ雷の蛇がうねり、鎌首をもたげる。

距離はハメートル。

「ここからが本番よ。気を引き締めなさい」

誰のせいで本気になつたのかとツツコみたい気持ちを抑え、僕は止めていた足を再び駆け出した。

残り七メートル。

「右上下上左右下左上右左右下右上左大きく右に退避!!」

舌を噛みそうな台詞を見事に捲し立てて、一気に僕の所に届いてくる。僕はそれを一文字も見逃すまいと神経を研ぎ澄まし、迫りくる必殺の雷撃を躊躇続ける。

六メートル。

ここに来て、アイツの攻撃パターンが読めてきた。基本的には魔法陣から生み出した雷の蛇と、少しタメの大きい文字通り稻妻を落とす一通りの攻撃しかして来ない。しかも右に右に攻撃するのが彼の癖があるので、三回に一回の割合で右を狙つてきている。どうやら心臓を攻撃して一撃で僕達を殺すつもりでいるらしい。本当に悪魔と鍵を殺すことしか頭にないみたいだ。

四メートル。

でも僕が一番驚いているのはそこではない。

マリーだ。

何しろずっと僕に指示を飛ばしながら自分の所に来る雷撃を躊躇する隙あらば鞭で攻撃を加えて牽制までしている。そのお陰で僕は、何の躊躇いもなく前に進める……瞬く間に襲いかかってくる閃光を避けながら独り言を呴いている僕も僕で凄いと思つけど。

三メートル。

それは僕の中に起つていてある変化が原因だと思つ。

田の前に浮かぶ、赤い文字。そしてそこに踊る、マリーの台詞。

そう、今僕は、他人が話した言葉、音が文字になって田に前に浮かび上がっているのだ。もしかしたら、これが彼女のいう“鍵”的能力なのだろうか？ まあでもこれで僕は、彼女の言葉を聞き逃すことはありませんだらう。

そう思つてた。

あと二メートル そこで変化が、起きた。

「 がつ！？」

僕の体に。

不意に腹部に迸る、形容できないほどの激痛。夕方に食らつた傷が開いたのだらう。あまりの痛みに思わず腹部を抑えるが、根性で何とかこらえ、走り続ける。時間にして一秒にも満たない。けど、それが命取りだつた。

「……………」

「 つ

しまつた、聞きのが 。

反射的に右に身をよじつたのと稻妻が落ちてきたのはほぼ同時。轟音。

「 つ！ ぐああああつ」

避け損なつた左腕の痛みに思わず苦悶の声をあげると、フランベルの顔が不愉快なまで歓喜に満ちた声で笑う。

「あははははつ。左腕に当たつたよ！ ソッキの傷が功を奏したみたいだね！」

「……………」

確かに全身に感覚もなくなりそうなくらいの痛みが駆け抜けているし、腕は見るも絶えられないくらい酷い。多分コイツを一発殴つたらもう使い物にならなくなるだらう。

僕は足を止め、ゆっくりと息を整える。

「あまりの痛みでもう諦めたのかな？ 僕的にはもっと痛がって欲しかったんだけど、別にいいか」

フランベルの言葉に合わせて、足元の魔法陣が輝きを増す。

「……」

やるなら、今だ。

「正面から大きいのが来る！」

マリーの言葉が目の前に映る。そんなことは分かってる。チャンスは一度きり。

「これで……終わりだ」

フランベルが冷たい声と共に、ゆっくりと右手を下ろす。

「 芹いつ！」

マリーの悲痛な叫びを合図に、僕はフランベルの方へと 飛んだ。

『人間が一番油断する時は、攻撃を加えようとする瞬間だ』
いつかは忘れたけど、親父がそんなことを言つてたのを思い出した。まさか一番役に立ちそうもない知識が僕を救うことになるなんて、人生何がためになるか分からぬもんだ。

予想もしなかつた反撃に、あからさまな焦りを見せるフランベル。その距離は五十センチ、魔法陣にはバリアービコロか一発の紫電を撃つほどの力は溜まつてない。

「 フルフル？」

すると奴はいきなり声を張り上げて自分の悪魔を呼ぶ。弾かれるよう振り返ると、彼女はゆっくりとこっちを向き、雷撃を溜める。ここで撃たれたら、今度こそひとたまりもない。

けど 。

「 無駄よ」

そんな声と共に、一本の鞭がフルフルの足に絡みつき、体勢を崩す。重心を失った彼女の一撃は僕達を大きく外し、駆けていく。

「ナイスアシスト」

僕は小さく咳くと、再びフランベルの方を睨みつける。
「よう、よくも『俺』の腹に穴あ空けてくれたなあ」

「ひいっ」

顔に恐怖が刻み、堪らず踵を返そうとする奴に。

「……させるか」

全体重をかけてつま先を踏みつける。

バキンッ、と小気味な音を立て、奴の顔が苦痛に歪む。

「左腕だつて痛てえし、ダチや馴染みのことをバカにしてくれたな」
そして激痛が迸る左手で胸倉を掴み、手元に引き寄せ。せ。
「でもな、一番許せねえのは　俺の相棒を泣かせたことだー」
右手の拳に力がこもり。

「ぶつ飛んで……反省しやがれえええええええッーー！」

右手を、全力で、奴の顔のど真ん中を思いつきりブン殴った。

戦闘・・五日夜（後書き）

皆さんスッキリしたところでお知らせがあります。『現代召喚者のススメ』変人はアクマを救うモンだぞ～』こと萌くん編をこのページで続けることにしました。なので皆さんこのページをどうか愛用していって下さい。

あと、新作『取り扱いコチュウイ！？』その少女は『こちす～』もよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837/>

現代召喚者のススメ ~あのー、アクマ出てきたんですけど~
2010年10月8日12時26分発行